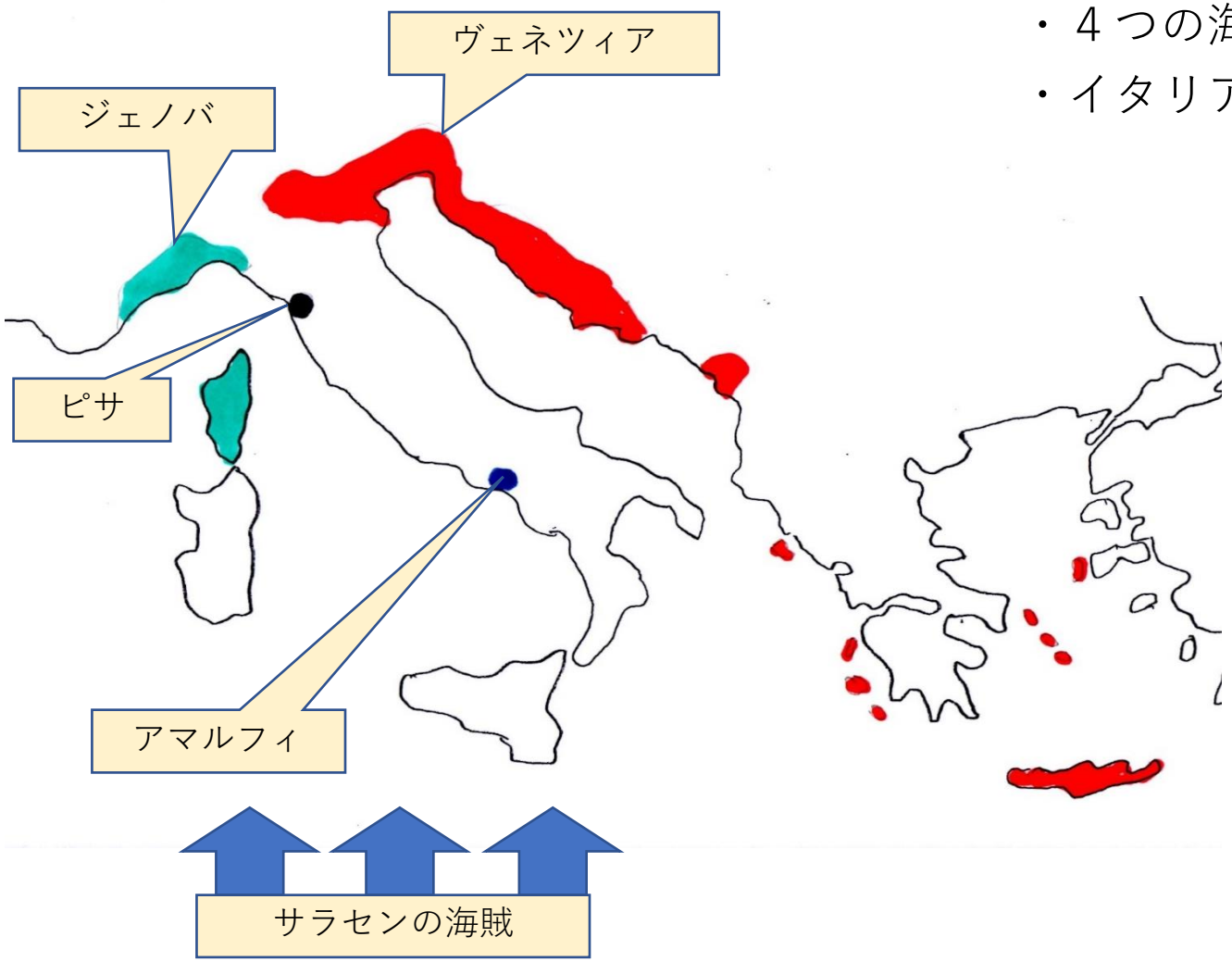
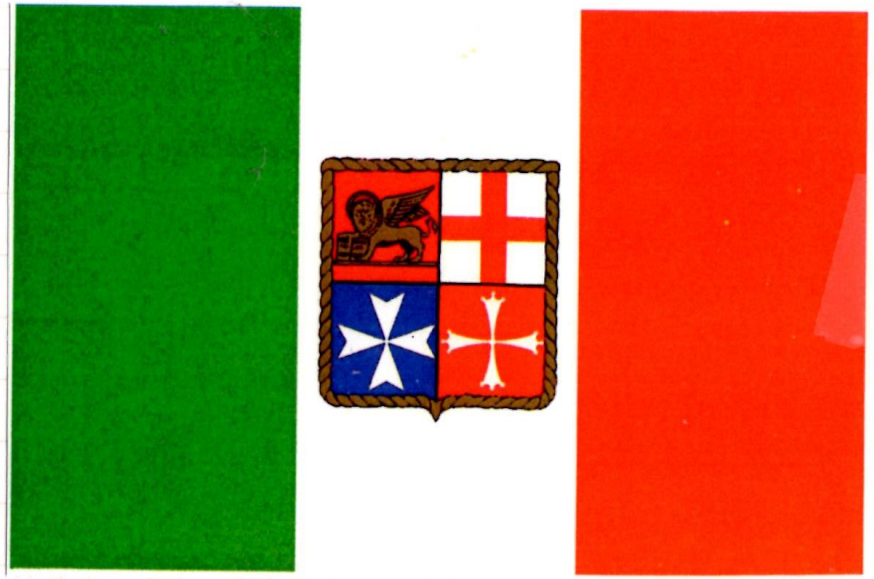
四つの海洋都市国家　　イタリア海軍旗

・ローマ亡き後の地中海はサラセンの海賊が跋扈した。
・４つの海洋都市は海に出るため南から順に戦線に参画した。
・イタリア海軍旗は国旗に４都市国家の旗を埋め込んでいる。



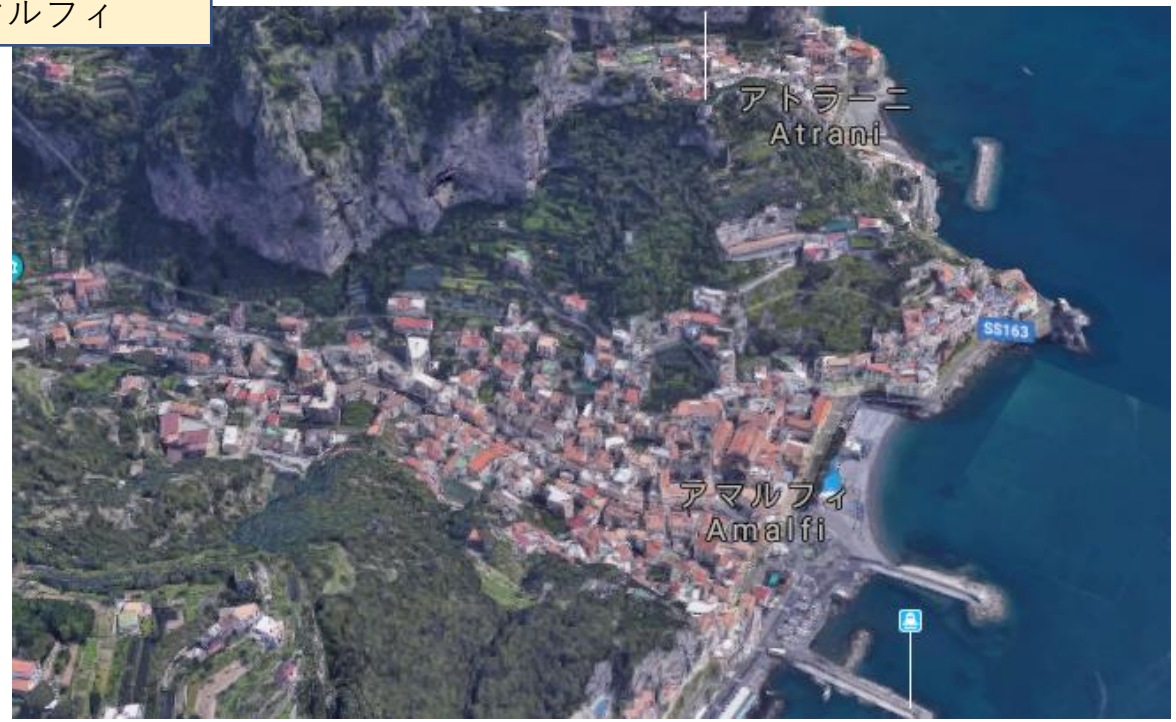
ヴェネツィア、ジェノバ
ピサ、アマルフィ



四つの海洋都市国家　アマルフィ

・東方イスラムから羅針盤を伝えた。
・1073年ノルマン侵入に続きフランス、スペインの支配を受け消沈した
・十字軍時代、イスラエルに聖ヨハネ騎士団を作る。後にロードス騎士団、マルタ騎士団と改名。

現在のアマルフィ

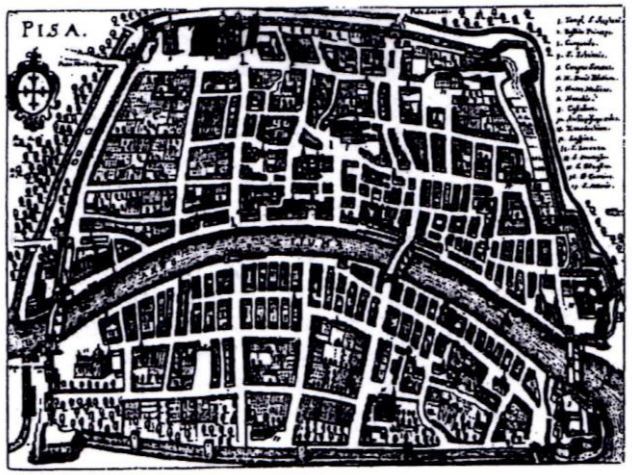


昔のアマルフィ

海から見たアマルフィ　17世紀の絵。背後に岩山が迫る渓谷につくられた町には、海からアプローチするしかなかった。Centro di cultura e storia amalfitana 提供

四つの海洋都市国家　　ピサ

現在のピサ

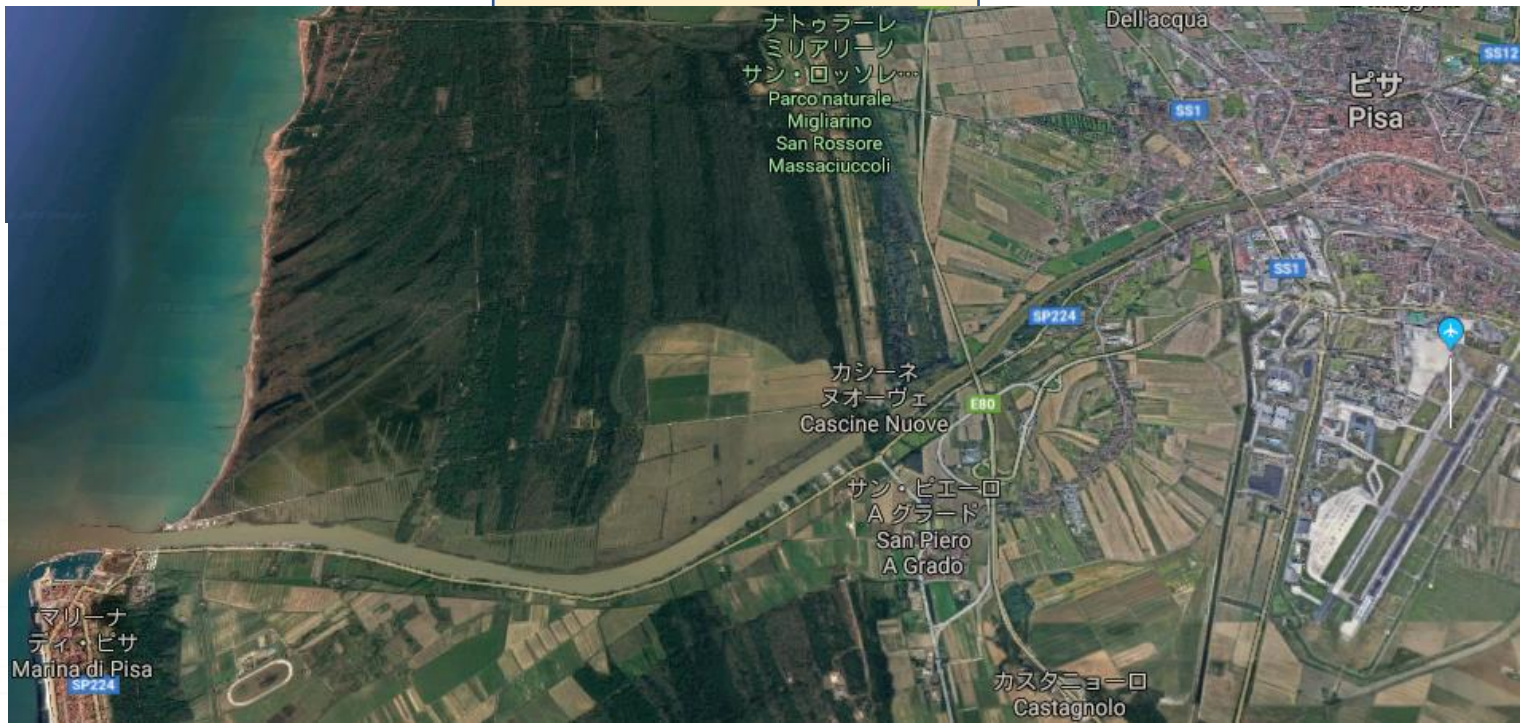


1640年のピサの鳥瞰図 城壁に囲われ、アルノ川をはさん

昔のピサ

- 東方イスラムからアラビア数字を伝えた。
- 都市内のギベリン派とグエルフ派の抗争が続き、グエルフの国（フィレンツェ）の圧力を受けた。
- 1284年　ジェノバとのメロリア海戦で消沈した

アルノ川河口から10Km



四つの海洋都市国家　ジェノバ

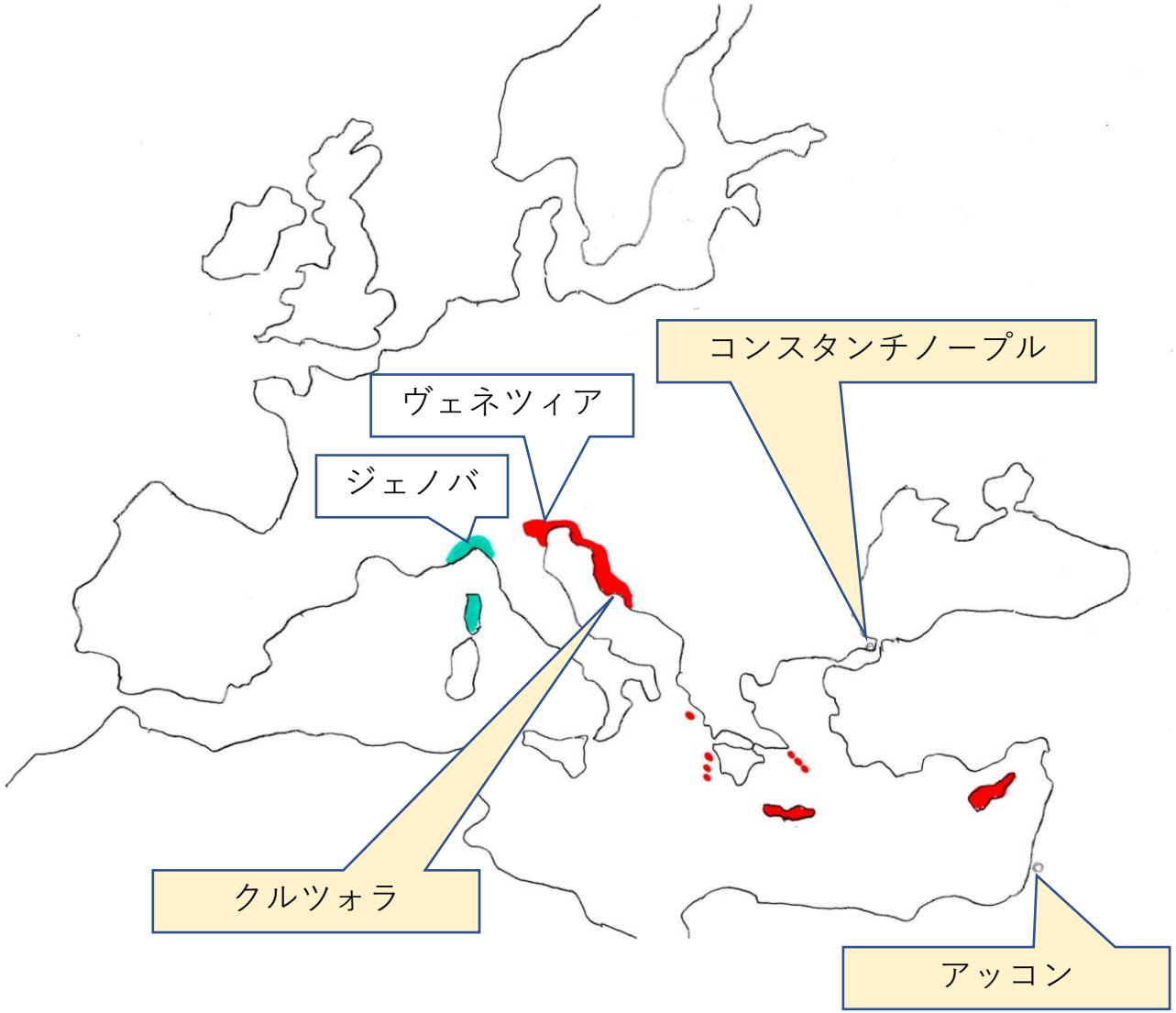
現在のジェノバ

- ドーリア、スピノラ、フィェスキ、グリマルディの４家族が抗争を繰返し、肝心な時に内紛で分裂した。
- ドーリア、コロンブスなど一匹狼の船乗りを輩出し冒険の航海に挑んだ。

ジェノヴァの港。（1482年の絵図。

クリストフォロ・デ・クラッシ
ガラタ海洋博物館

四つの海洋都市国家



ジェノバとの戦い

第１次戦以後、125年のうち計20年戦いを続けた

＜第１次ジェノバ戦＞　1257年～1268年

・ジェノバはニケーア帝国パラオロゴスと組み、コンスタンチノープルからラテン帝国を放逐。ビザンチン帝国が復帰。ジェノバ内紛で自滅

＜第２次ジェノバ戦＞　1291年～1298年

・アッコン陥落後、黒海を巡る海賊合戦のあげくクルツォラ沖海戦でヴェネツィア大敗。マルコポーロが捕虜になりジェノバ牢で見聞録

＜第３次ジェノバ戦＞　1350年～1355年

・オスマントルコに圧迫されたビザンチン帝国がヴェネツィアに海軍派遣要請。黒海貿易を争うジェノバと戦いに。ジェノバ内紛で自滅

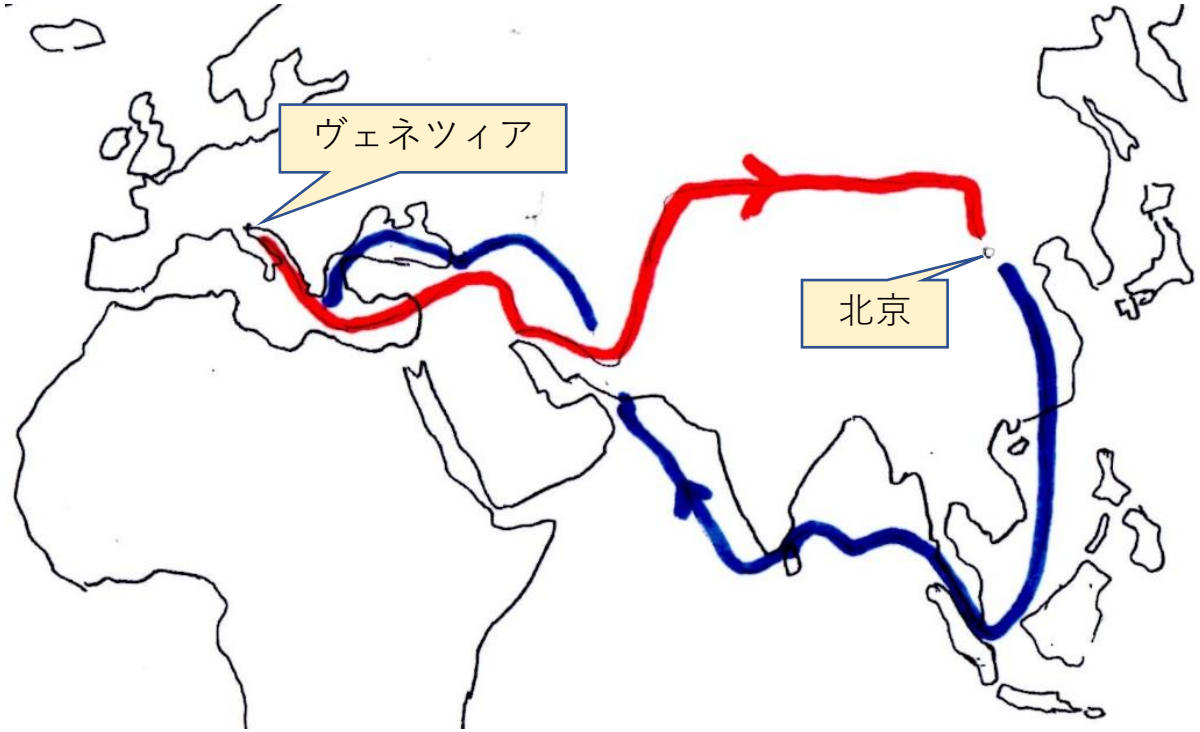
ジェノバとの戦い

マルコポーロ

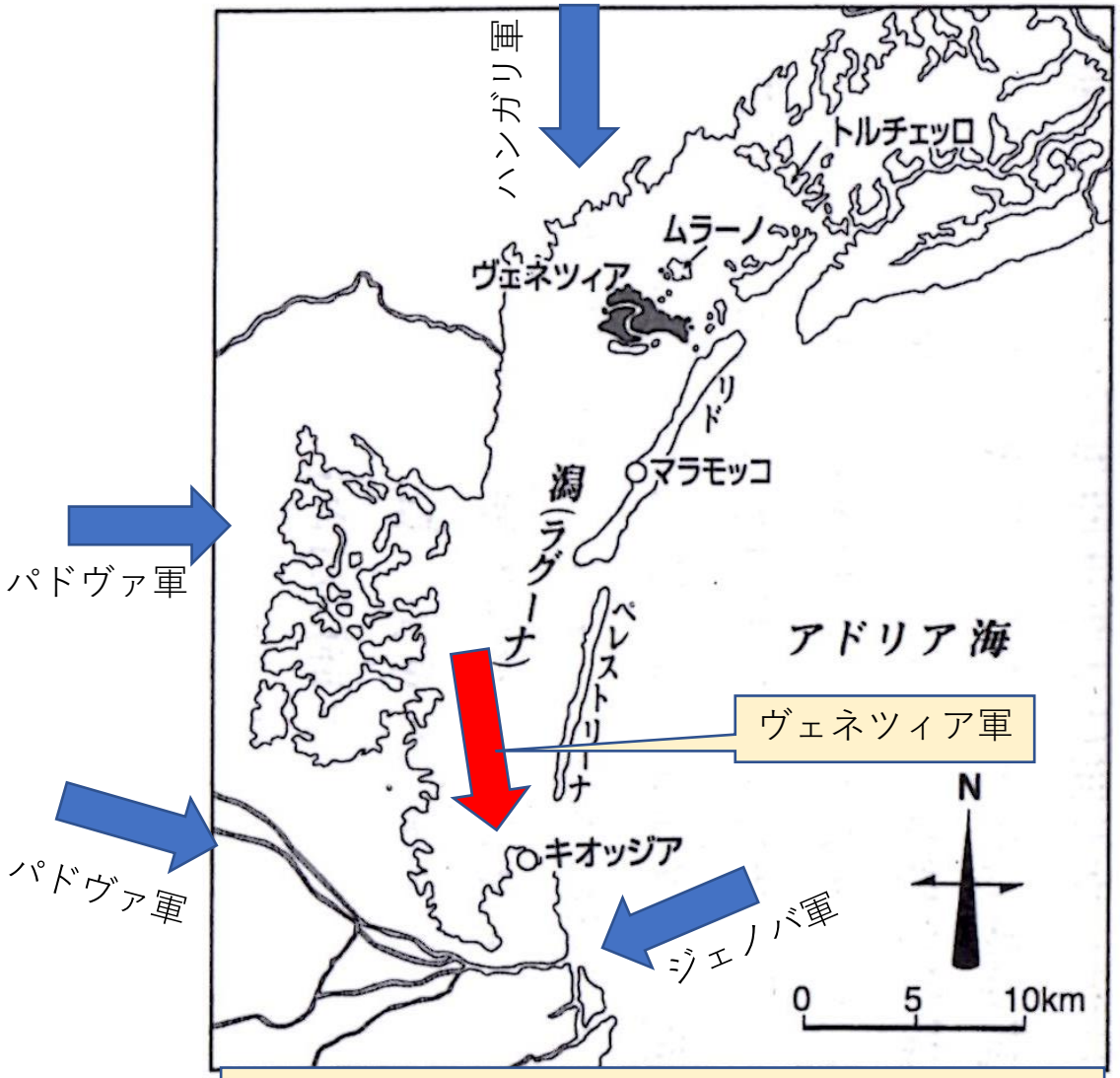
マルコ・ポーロがヴェネツィアの港からアジアへ向けて出港する風景。（14世紀。オックスフォード、ボードレアン図書館）

マルコポーロの出航

- 1271年　地中海東岸から天山北路を経て元へ
- 17年間　フビライハンに仕える
- 1295年　東シナ海、インド洋、黒海を経て帰国
- 20年間も家を留守にする人は普通に居たという



ジェノバとの戦い



ヴェネツィア周辺（キオッジャの戦い）

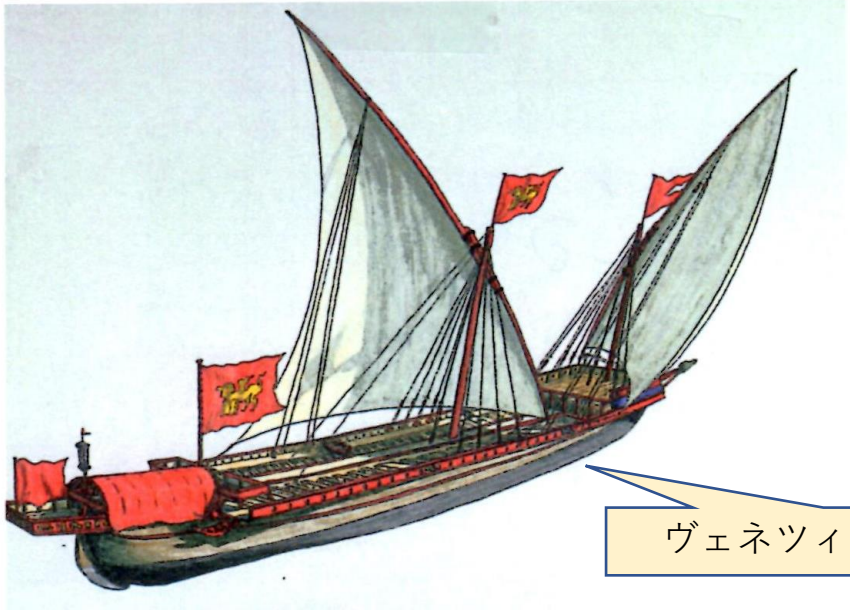
第４次ジェノバ戦

＜1378年～1381年＞

・1378年　ヴェネツィアがコンスタンチノープル近くのテネドス島に要塞建設。

・ジェノバ反発。ハンガリア王、パドヴァ僭主と同盟してヴェネツィアへ攻め込む

・ヴェネツィアはラグーナの杭を抜いて徹底抗戦
ピサーニとカルロゼン活躍



ヴェネツィア　ガレー船

ジェノバとの戦い

キオッジャの戦い

ヴェネツィアの海軍力
1379年、ジェノヴァはヴェネツィアに近いキオッジアを包囲したが、翌年ヴェネツィア艦隊の前に壊滅的な敗北を喫した。この16世紀の絵を見ると、ヴェネツィアのガレー船が大三角帆を持っているのがわかる。

第４次ジェノバ戦

・1379年　ジェノバが隙を見てキオッジャ占領

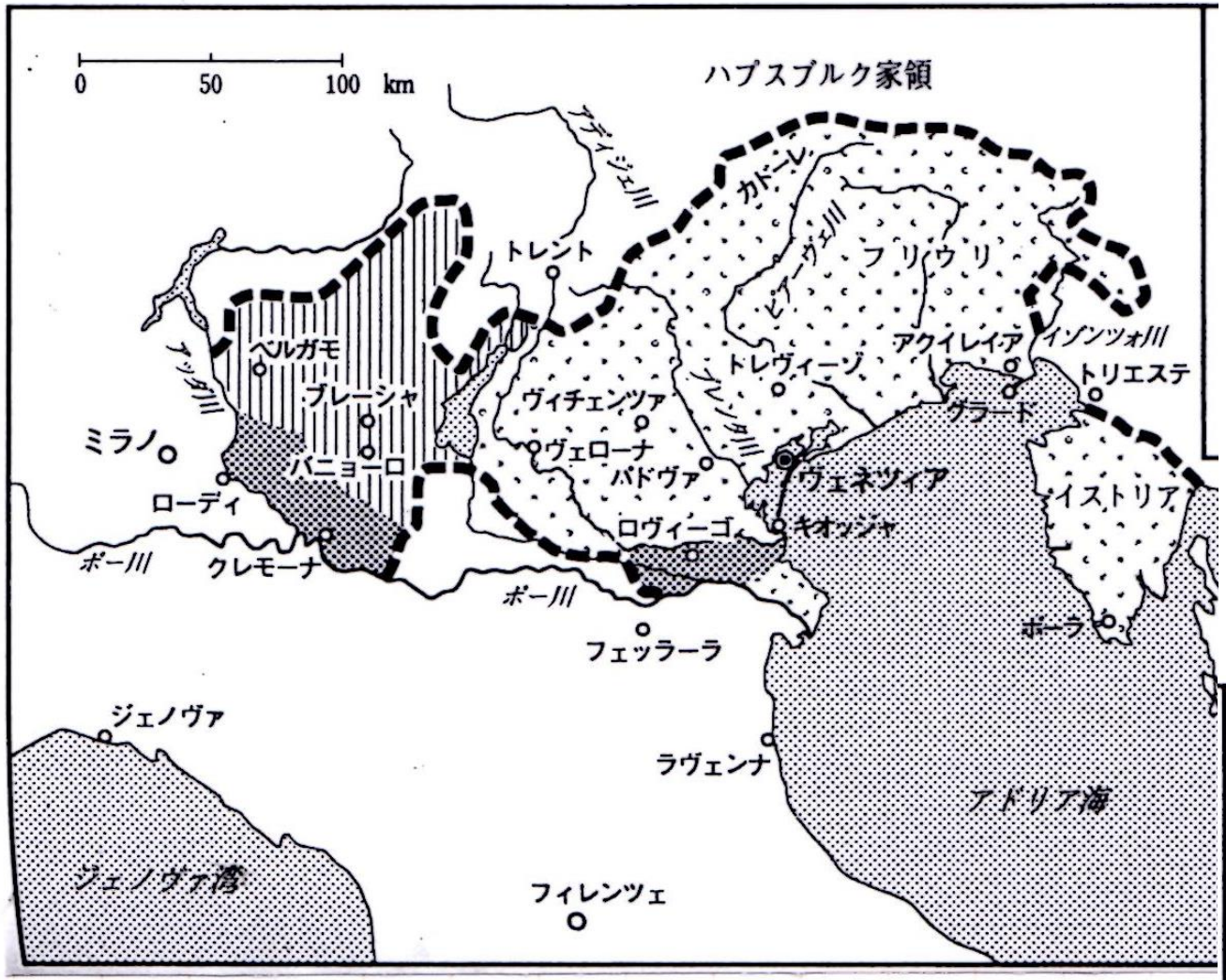
・1380年　ピサーニ北側港出口に船を沈め封鎖。
カルロゼン南側封鎖。兵糧攻めで勝利。
アドリア海待機のジェノバ艦隊も撃破。

・1381年「トリノの講和」
ヴェネツィア勝利

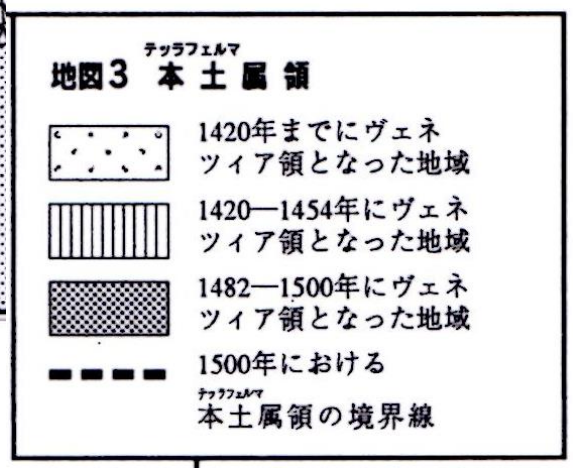
北側：キオッジャ

南側：ブレンダ川

ジェノバと戦い済んで　本土（テッラ・フェルマ）



本土拡張



・ジェノバ戦を制して本土への足掛かりを得る。

・1402年　ミラノ　ディスコンティ侯爵の急死で
ヴェローナ、パドヴァなど北イタリア
各都市がヴェネツィア属州化を希望。
ヴェネツィアは各都市自治を認めた。

・ヴェネツィアは安全な河川交易、安定した食料、10倍の人口（15万人→150万人）を得た。

ジェノバと戦い済んで　　戦いをするな

元首トマソ・モチェニーゴ

・ジェノバ戦を制してヴェネツィアは最盛期を迎える

・1423年　元首トマソ・モチュニーゴの言葉が残っている

「輸出・輸入は1,000万ドュカートで、利益は400万ドュカートにのぼる」

「45隻の大型ガレー船に11,000人の船員が常時出ていける状態にある」

「300隻を超える120トン級以上の大型帆船には8,000人の船員が乗船し」

「3,000隻に及ぶ24～120トン級の小型帆船には17,000人の船員がいる」

「造船工は6,000人を超え、絹・綿織物、帆布織工は16,000人に達する」

「年収が700～4,000ドュカートある市民は1,000人を超える」

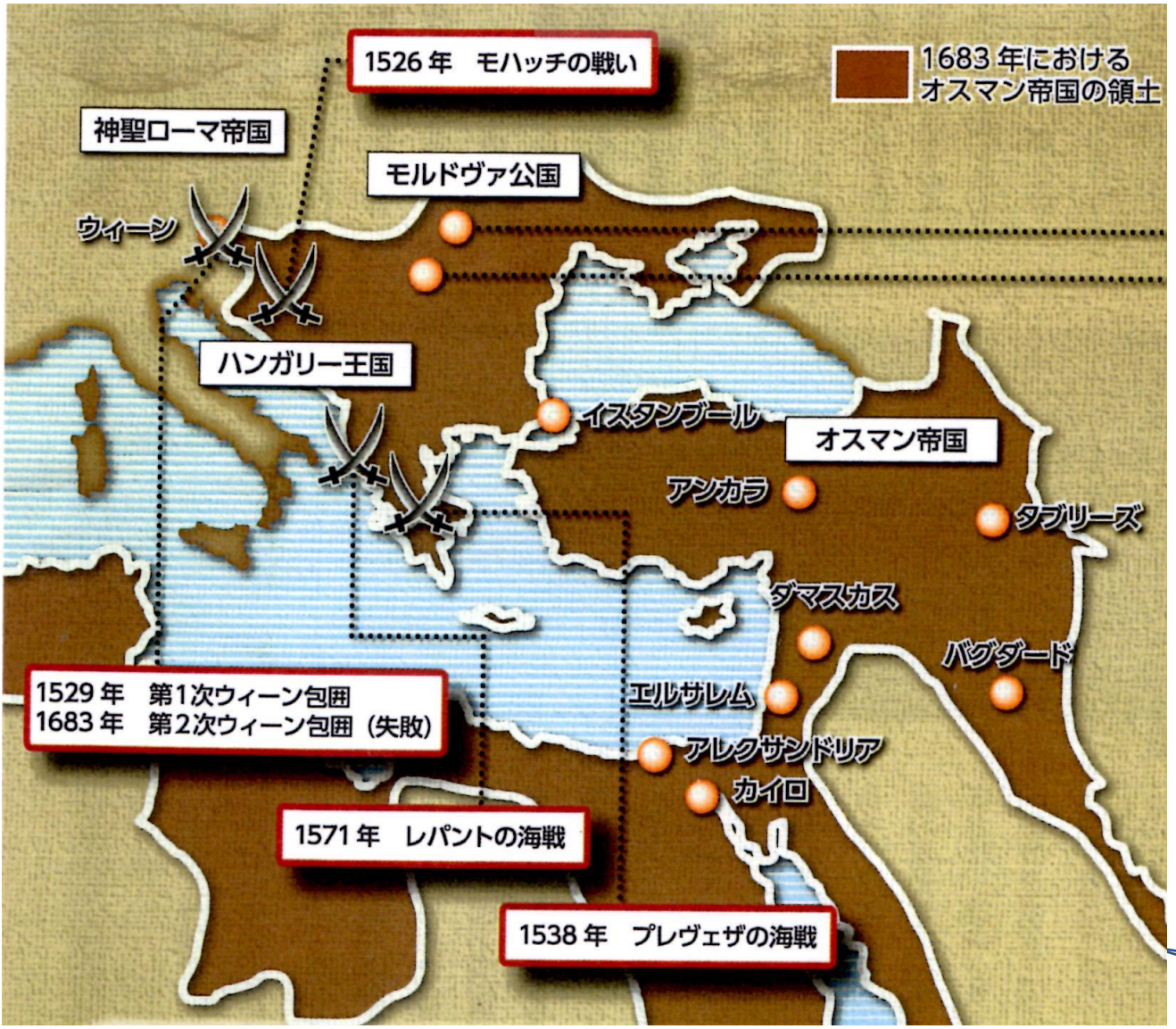
（家賃を除いて年に15～20ドュカートあれば楽に暮らせたという）

戦いをするな。

このままいけばヴェネツィアはキリスト教世界第一の経済大国であり続けるであろう。

しかし、時代は許さなかった

大国の登場



オスマントルコの拡大

オスマントルコ

- 1281年　オスマンが小アジア内陸部に
  イスラム教　オスマントルコ帝国を建国。
- 1362年　ビザンチン帝国弱体化に乗じ
  バルカン半島進出。アドリアノープルを首都に
- オスマントルコは稀代の陸軍国であり、
  皇帝の一声で10万人の軍隊を編成できた。

↓

- 1922年　滅亡、スルタン制廃止

オスマントルコ

マホメット２世

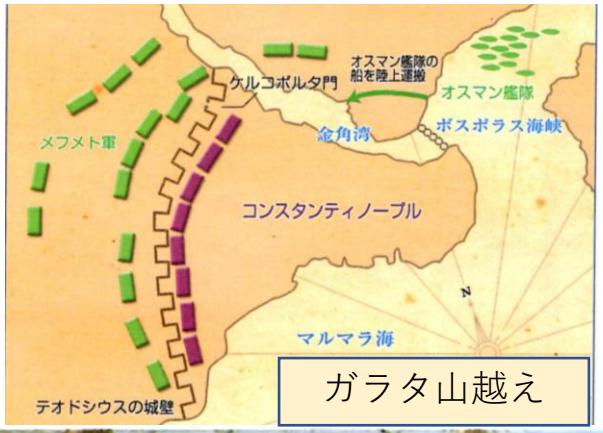
・1451年　マホメット2世が19歳でスルタン就任
・1452年　攻城時の控え城メルリ・ヒサール建設
・1453年　コンスタンチノープル攻城

メルリ・ヒサール
ボスポラス海峡欧州側岸辺

コンスタンチノープル西方防衛
テオドシウスの城壁

オスマントルコ　　マホメット２世

コンスタンチノープル攻城



ガラタ山越え

・1453年　コンスタンチノープル攻城
　4/16日　攻城開始。砲撃、地下道爆破、
　　艦隊のガラタ山越え敢行
　5/13日　落城

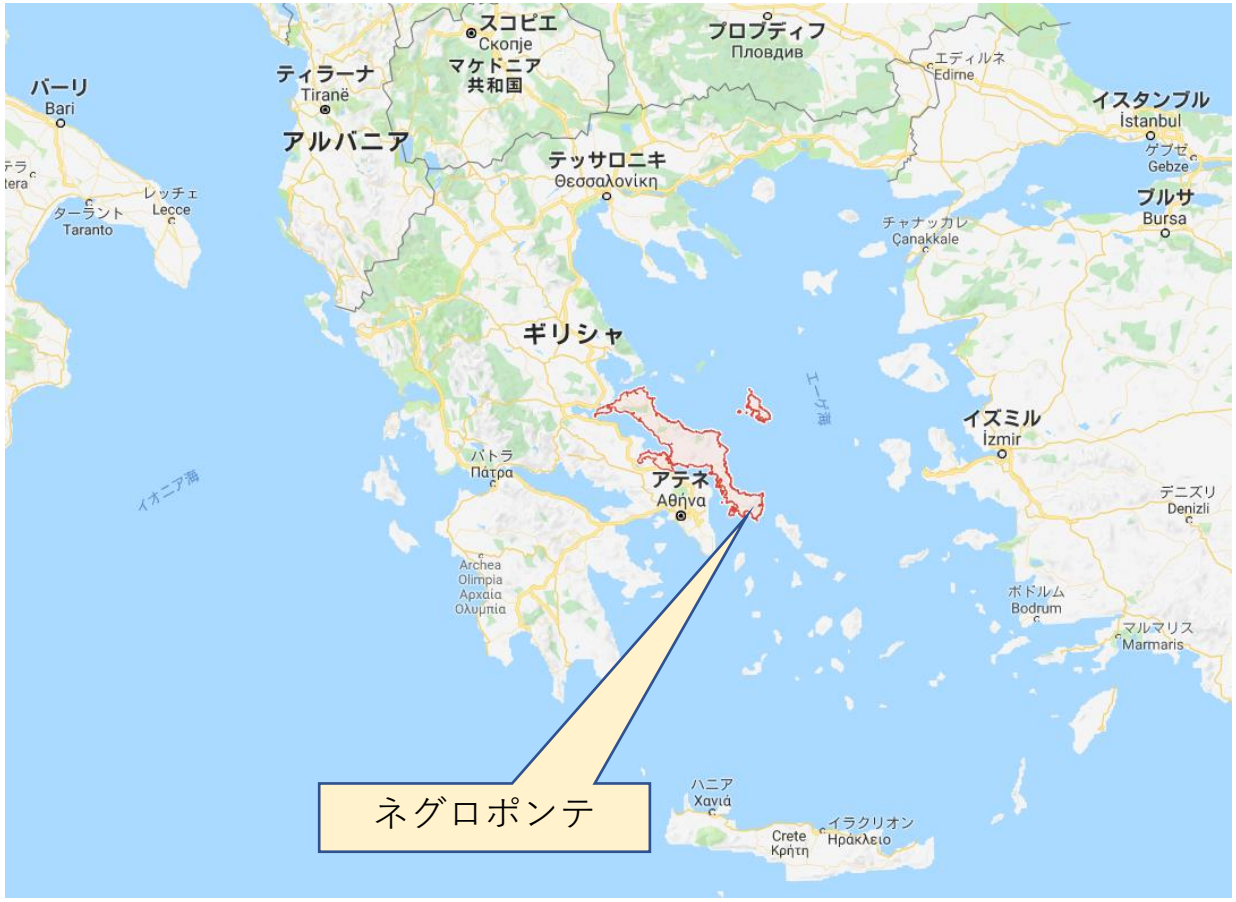
マホメット２世

オスマントルコ

コンスタン　オーギュスタ美術館

マホメット２世

・1453年　ビザンチン帝国は滅亡した
・1470年　ヴェネツィアにも第１次トルコ戦を仕掛ける
・1479年　ヴェネツィアはネグロポンテを譲渡して講和



オスマントルコ

マホメット２世

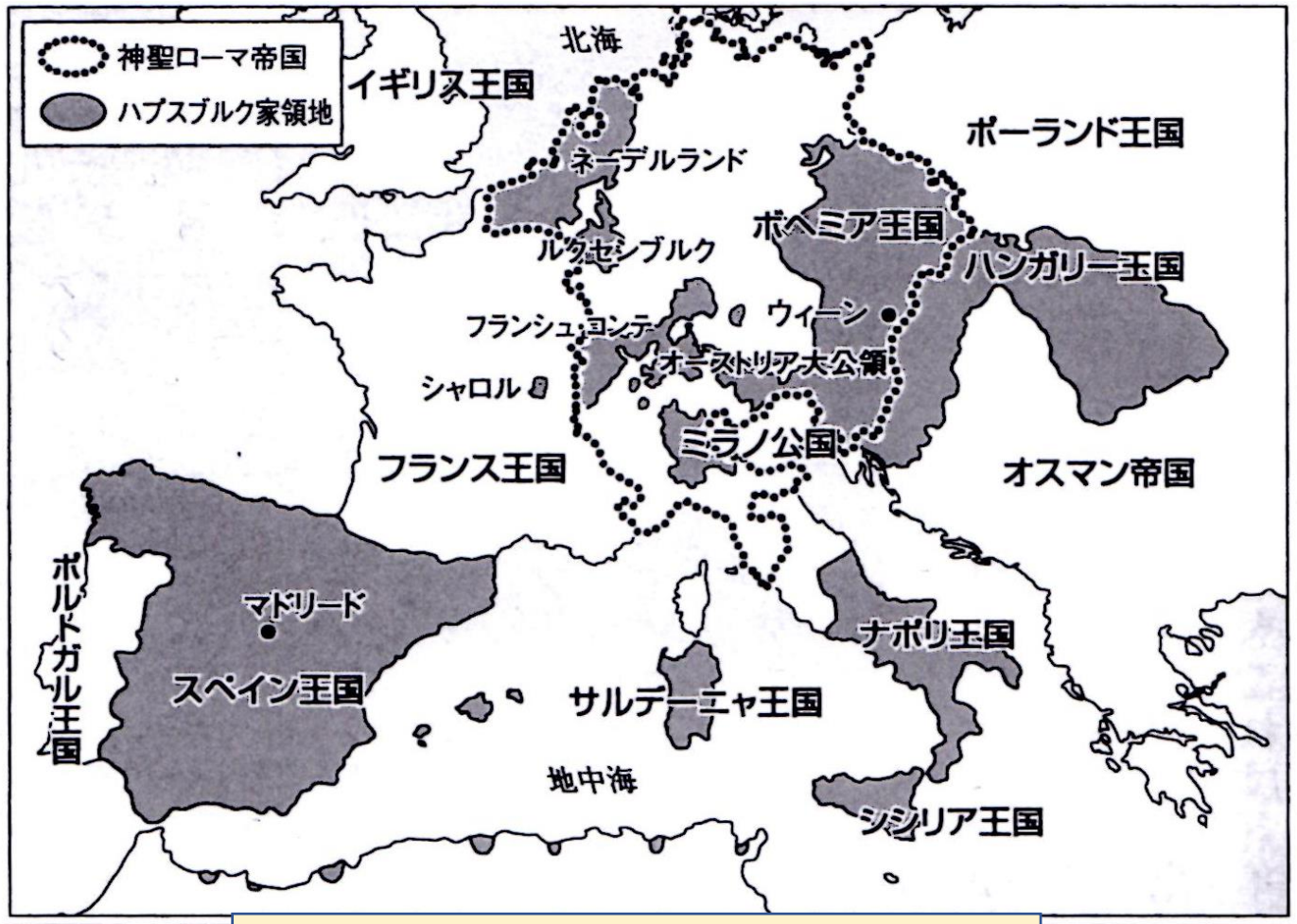
ベッリーニ
ロンドン　ナショナルギャラリ

・1479年　ヴェネツィアに画家の派遣を要請。
ベッリーニが描いたマホメット肖像画は
ロンドン　ナショナルギャラリに残る。
「憂いに満ちた目元」←塩野七生評

・1481年　マホメット2世は死去する。

この後、ヴェネツィアは国の存続の為
気紛れな大国と交易に、戦争に緊張を
強いられ続ける。第７次トルコ戦まで
250年の内、70年間、戦争に至り闘う

大国の登場　　ハプスブルク　神聖ローマ帝国



カール５世統治下のハプスブルク帝国

・1273年　ハプスブルク家ルドルフが
　　神聖ローマ帝国皇帝に選ばれる

・1282年　ルドルフがオーストリア支配開始

↓

・1508年　マクシミリアン１世(1508～1519)
　　皇帝となり婚姻政策で拡張

・カール５世(1519～1556)、
フィリップ２世(1556～1598)は
カトリック勢力拡大に奔走。

↓

・1918年　滅亡。皇帝廃位

↑

奇妙な暗合。オスマントルコの年代
立国1281年、滅亡1922年　とほぼ同じ

大国の登場

ハプスブルク　神聖ローマ帝国

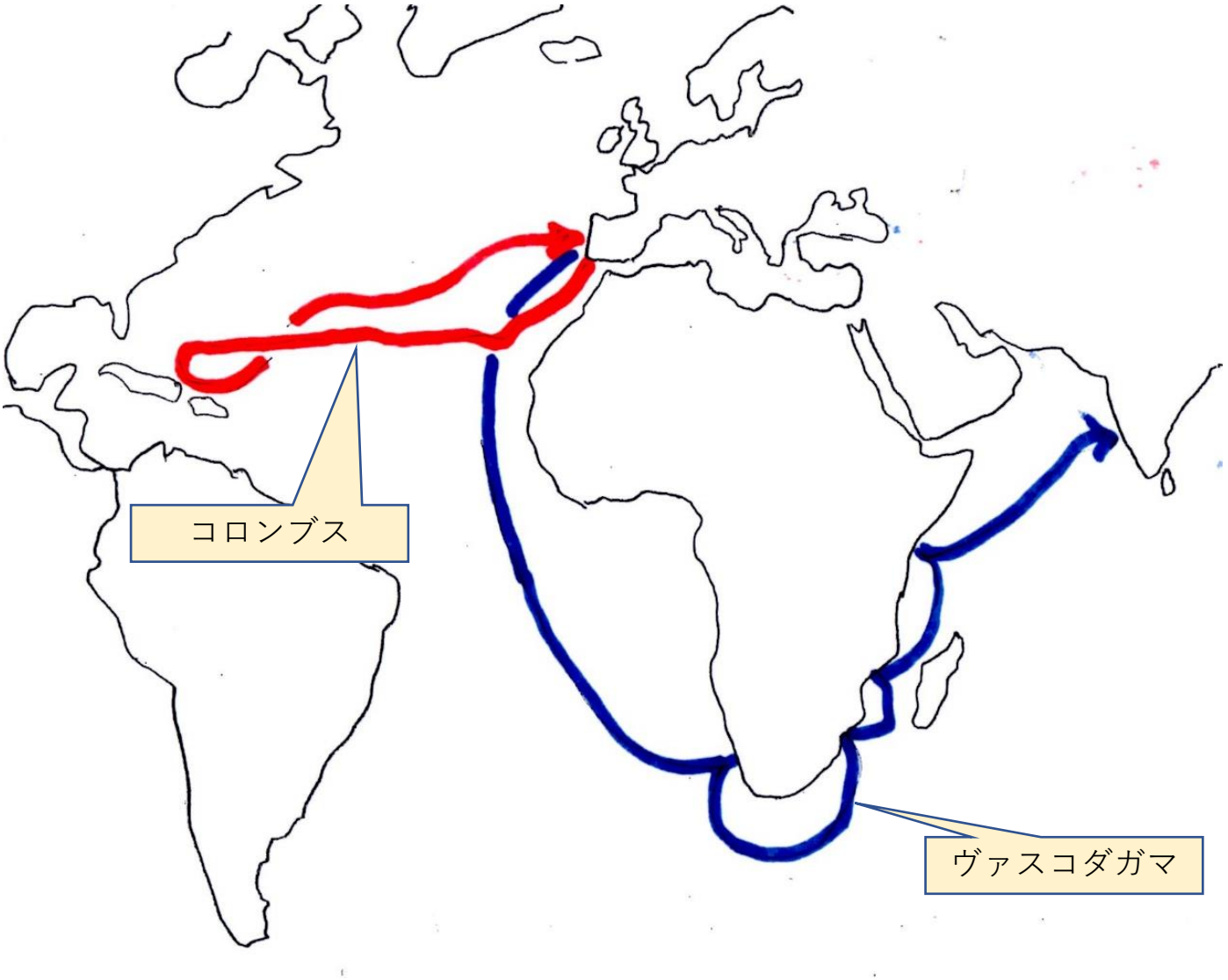
ミュールベルクのカール５世
テッツアーノ　プラド美術館

・カール５世(1519～1556)の時代

・1527年　サッコディロマーナ（ローマ略奪）
スペイン、フランドル、ドイツ、ナポリを領有。
フランスのフランソワ１世は周囲を囲まれ戦争。
ローマ法王がフランスに付いた為、ローマ略奪。
手工業者はヴェネツィアへ逃げ込んだ。

・1529年　第１次ウイーン包囲戦
オスマントルコ　スレイマン１世がウイーン包囲。
防衛成功後、トルコは南のエーゲ海へ向かう。

大航海の時代

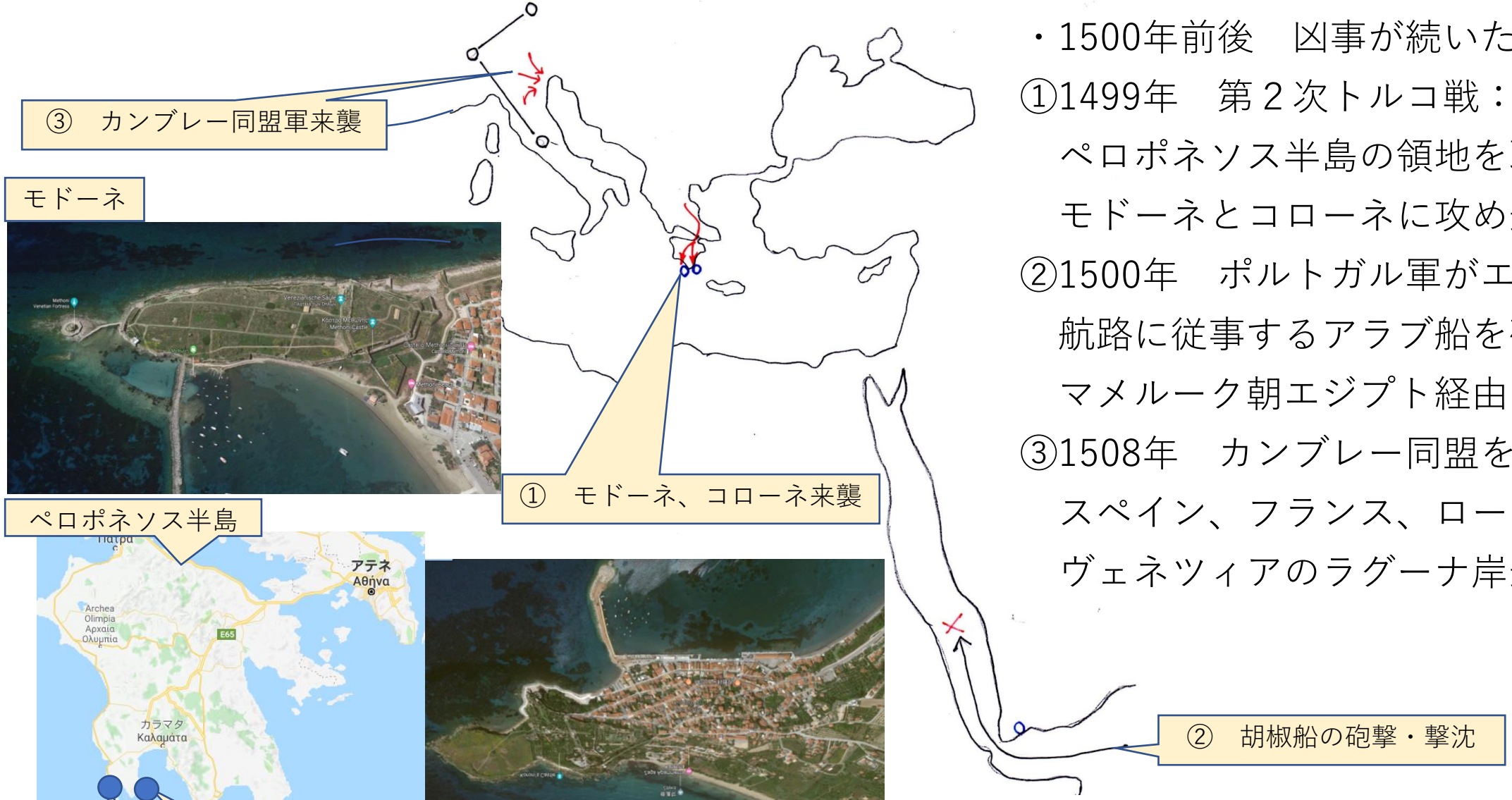


コロンブス／ヴァスコダガマ

・1492年　コロンブス　新大陸発見
・1497年　ヴァスコダガマ　インド航路発見

・ヴェネツィアはフランドル航路を持ち、
リスボンに商人が常駐していたので、
情報は直ぐ本国に到着
・コロンブスの持帰った物資はヴェネツィアの
取り扱い対象外のため無視
・ヴァスコダガマの物資は胡椒で色めき立つが、
「ヴェネツィアの扱う年商の1/50」
「行きに12か月、帰りに８か月」
「13隻行って、帰ったのは８隻」などから
興味鎮静

大国登場／大航海の時代　　凶事連続



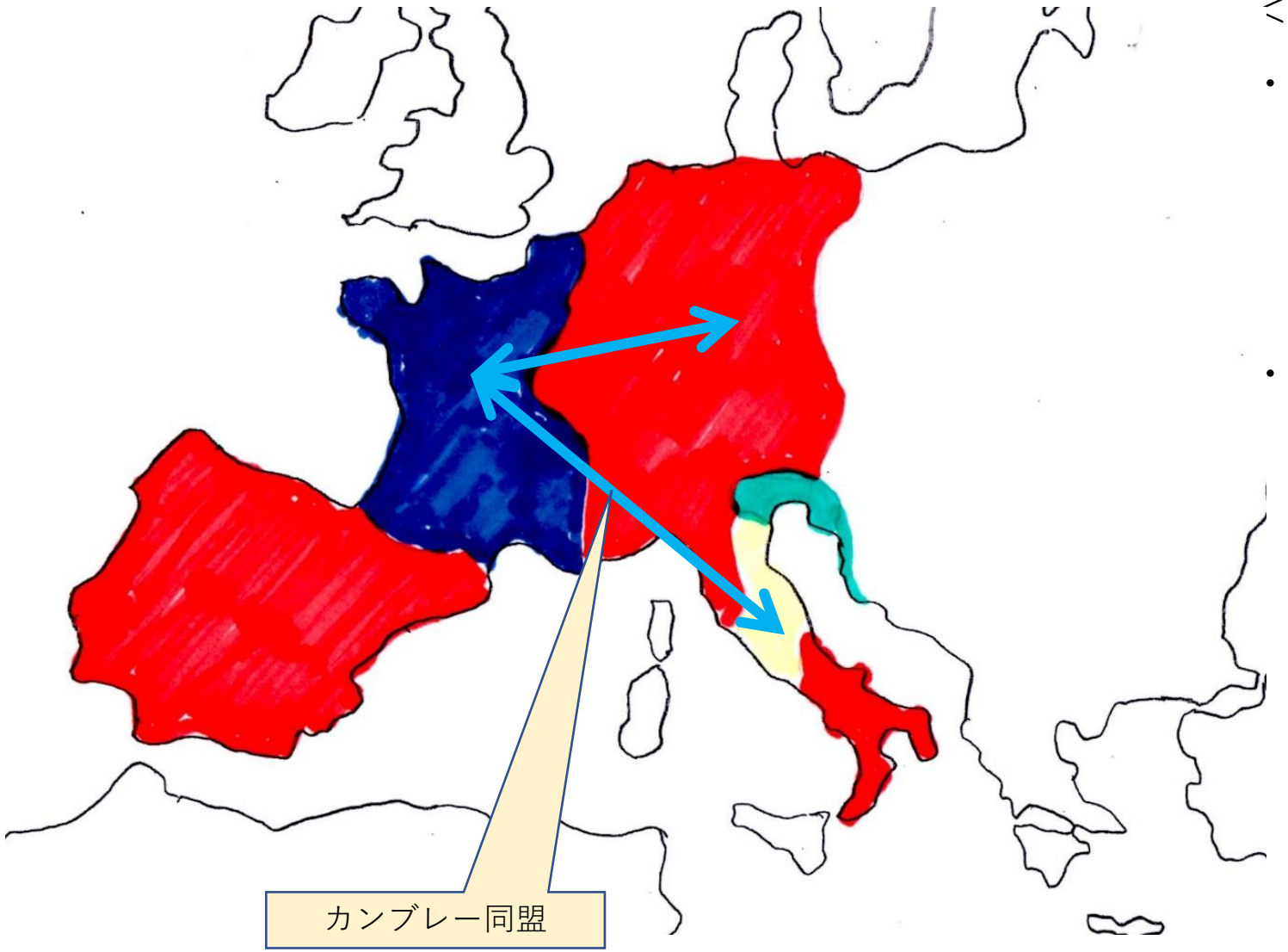
・1500年前後　凶事が続いた

①1499年　第２次トルコ戦：トルコ軍が
ペロポネソス半島の領地を取り返しに来襲
モドーネとコローネに攻め込む

②1500年　ポルトガル軍がエジプト～インド
航路に従事するアラブ船を砲撃・撃沈。
マメルーク朝エジプト経由の胡椒入荷激減

③1508年　カンブレー同盟を結んだ
スペイン、フランス、ローマ法王連合軍が
ヴェネツィアのラグーナ岸辺まで攻め込む

大国登場／大航海の時代　　カンブレー同盟



＜1508年カンブレー同盟の危機発生＞

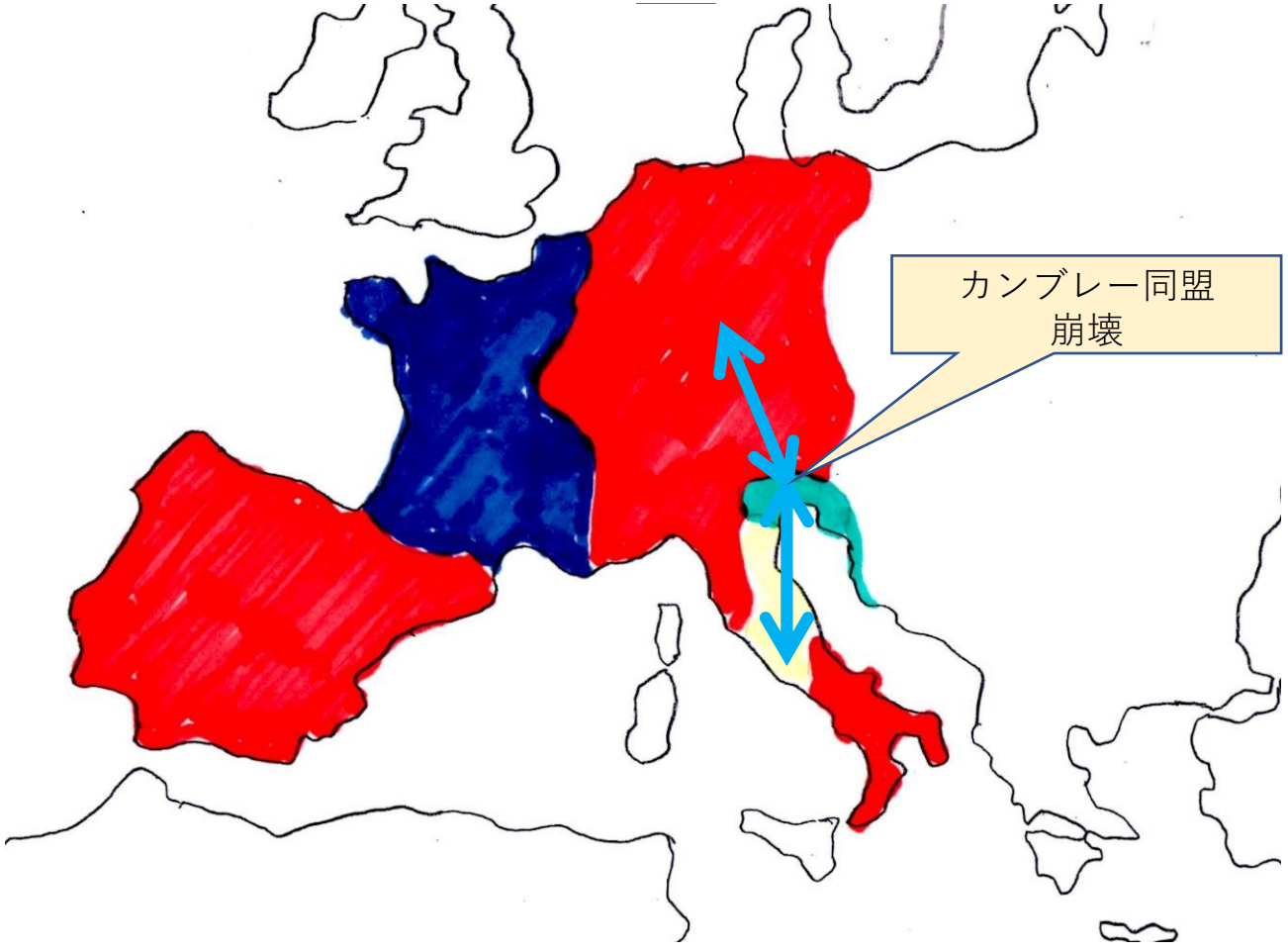
・1508年　ミラノ、ナポリを占拠した神聖ローマ帝国（ドイツとスペイン）がフランス王とローマ法王を抱き込み、ヴェネツィア本土属州の割譲を狙った。

・犬猿の仲の神聖ローマ帝国とフランスの接近を見逃した、後にも先にもない、ヴェネツィア外交の大ミスだった

大国登場／大航海の時代　　ロレダン

ベッリーニ　ロンドンナショナルギャラリ

・元首レオナルド・ロレダンは必死の外交を繰り広げる
・ローマ法王を同盟から引き離しドイツとも手を結ぶ。
・1510年　同盟からフランスの追い出し成功



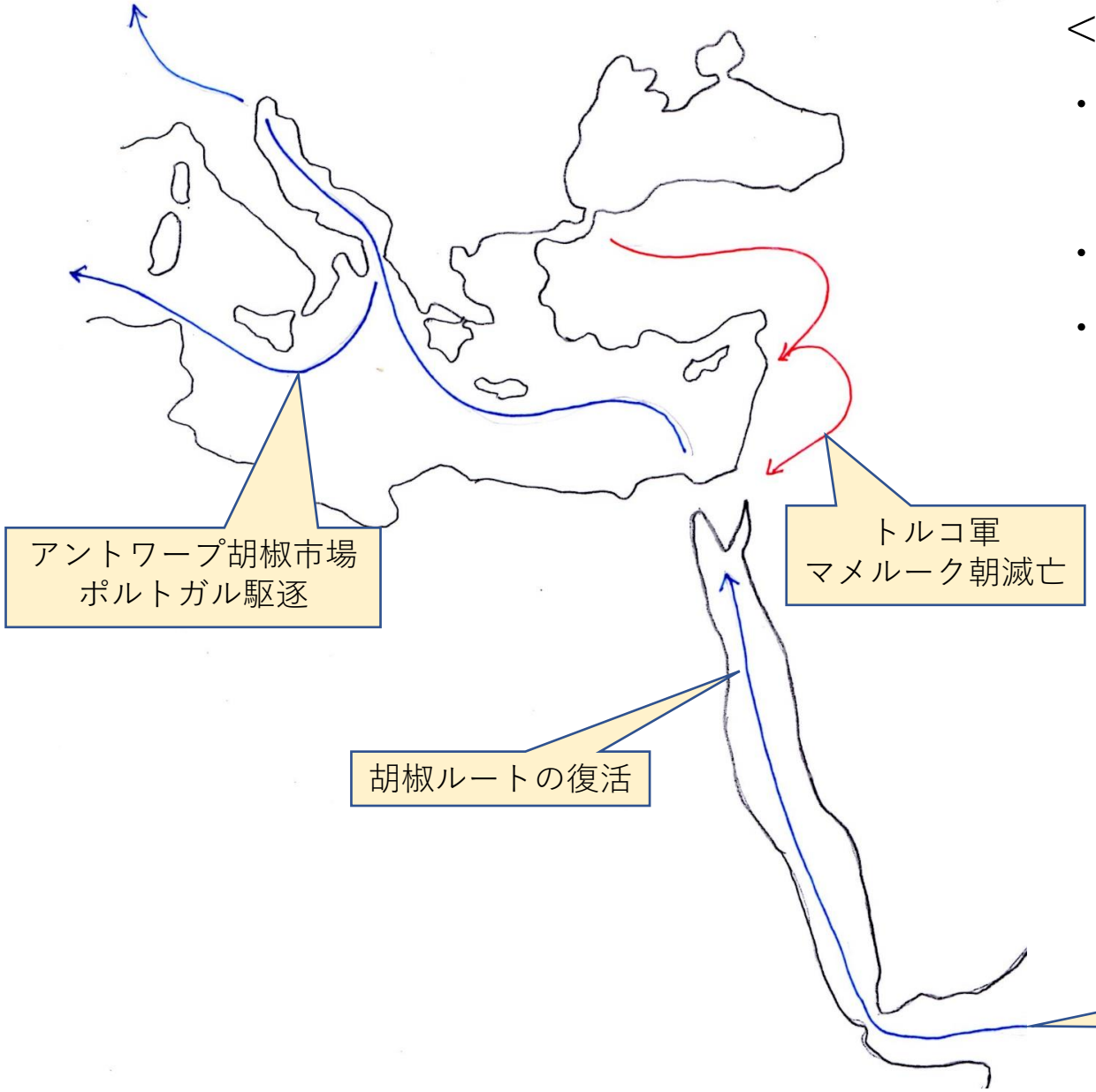
大国登場／大航海の時代　　好転

＜カンブレー戦勝利の頃、事態は好転する＞

・1517年　オスマントルコがマメルーク朝エジプトを倒して紅海の制海権を獲得、胡椒の流入復活。

・アントワープ胡椒市場からポルトガル駆逐

・胡椒貿易上の優位は1600年オランダの東インド会社設立まで続く。



アラブ　ダウ船

大国登場／大航海の時代

ムラーノ島　ガラス博物館

通商五人委員会

・カンブレー戦の頃、体質改善に取り組む

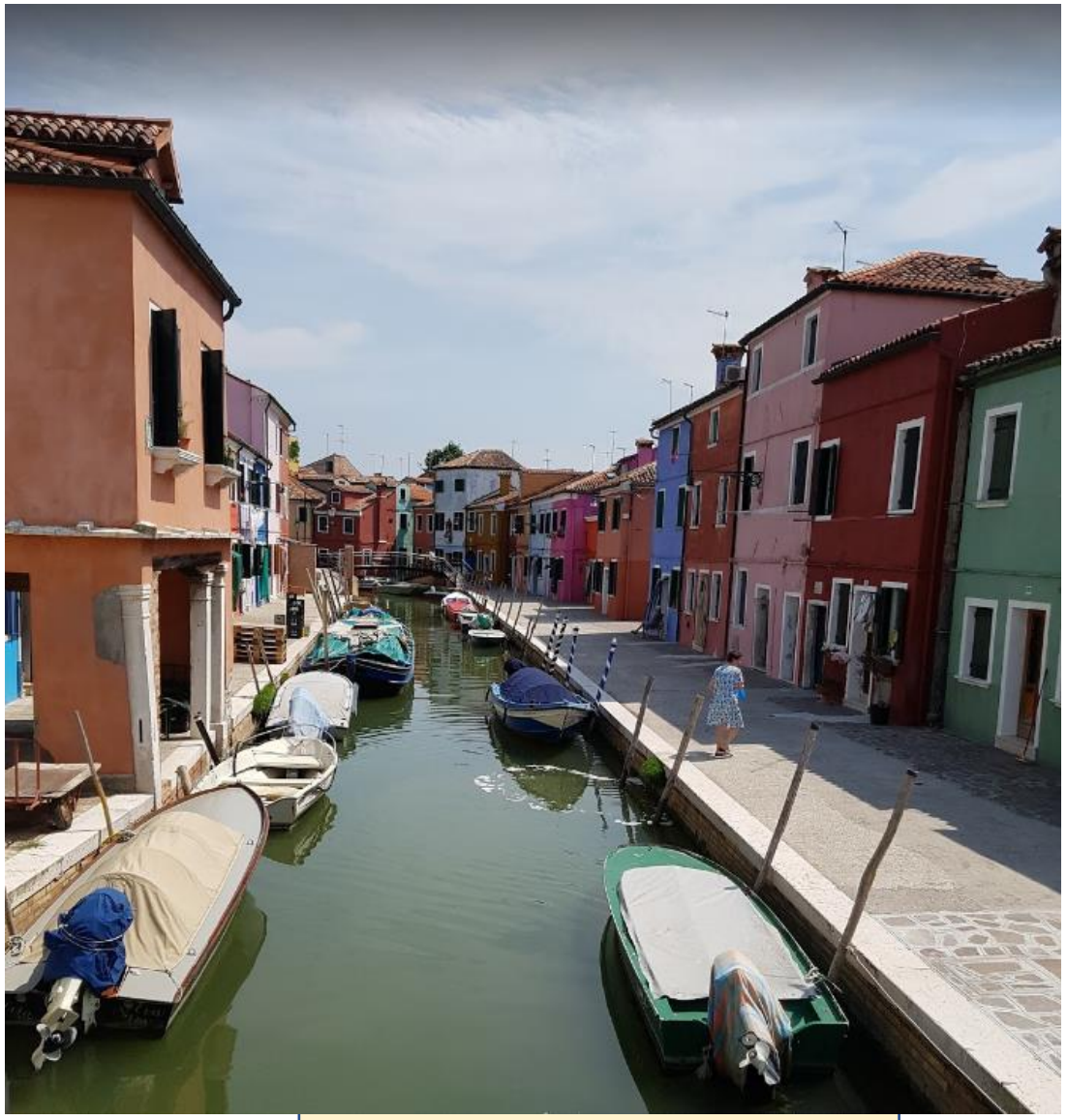
・1506年　「通商五人委員会」を設立し、
経済再編を図る

・交易だけでなく、毛織物、綿織物、
ガラス製造　など手工業に力を注いだ。

・ラグーナ内の各島へ拠点が作られた

ガラス博物館展示品

大国登場／大航海の時代　　通商五人委員会

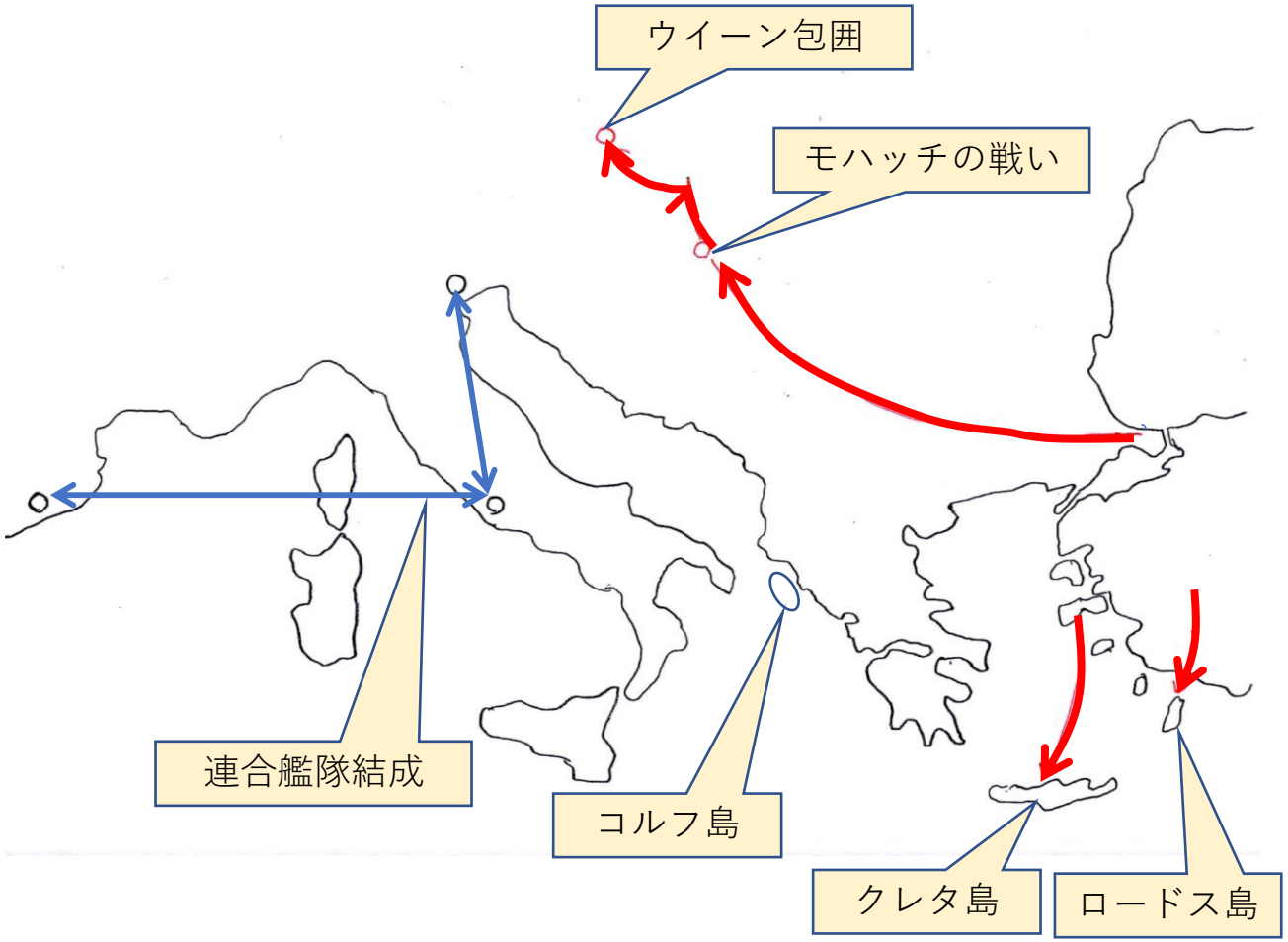


プラーノ島　綿織物の島

・毛織物、綿織物、ガラス製造業者は
　サッコディロマーナから逃れた人々も多かった
・また、本土属州で農園経営を拡大した。

レース博物館展示品

トルコとの闘い　　プレヴェザ海戦　第３次トルコ戦

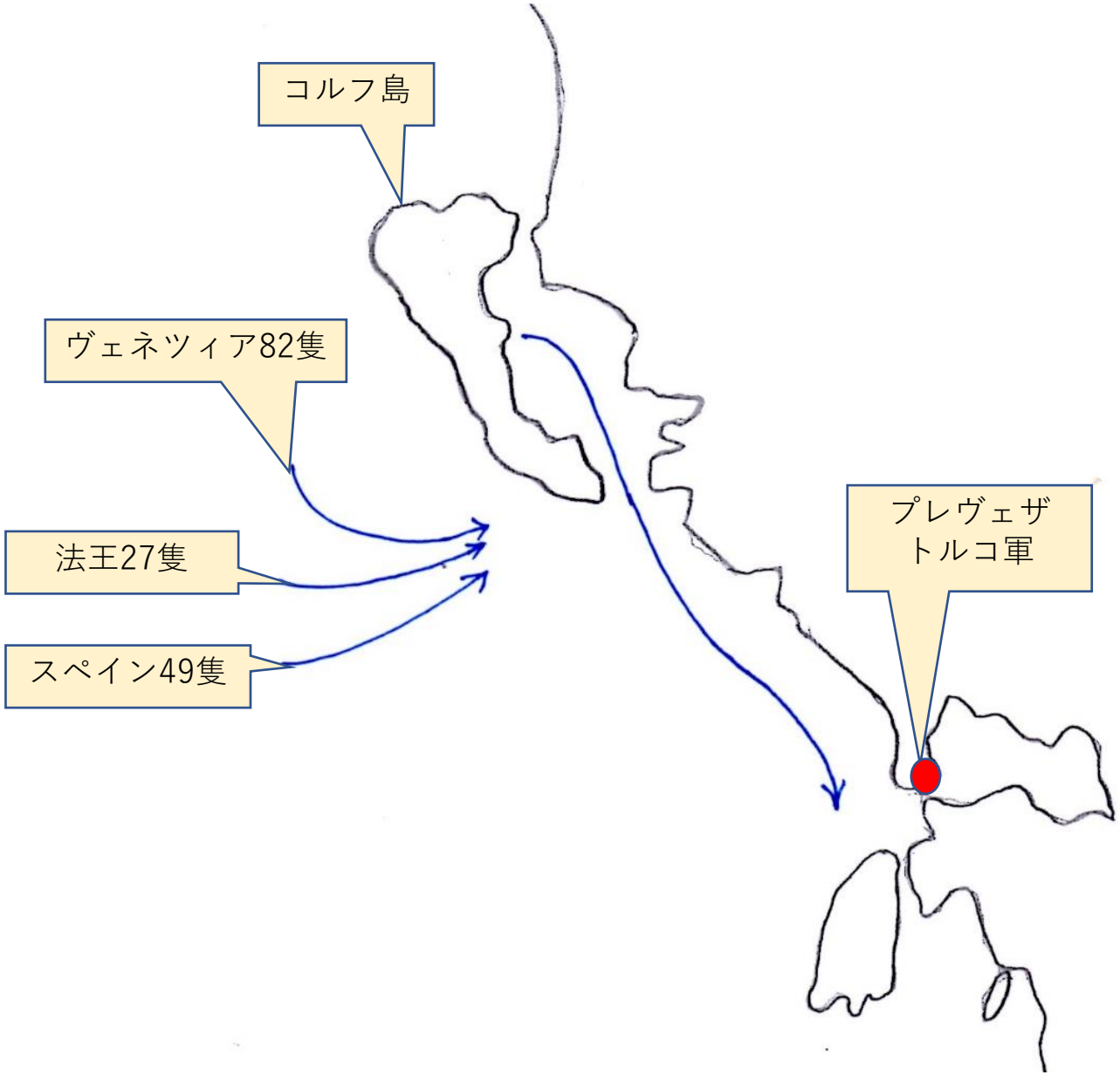


・ヴェネツィアは大航海時代到来の混乱の中、東地中海交易を守るが、トルコが立ち塞がる。

・スレイマン１世（1520～1560）は
1506年　モハッチの戦いでハンガリー領有
1529年　第一次ウィーン包囲は失敗に終り
矛先をエーゲ海に向け、第３次トルコ戦が始まった。

・キリスト教国はローマ法王、スペイン、ヴェネツィアの連合艦隊の結成を決めた。

プレヴェザ海戦



紛糾／コルフ島

・しかし、行き先と司令官の選定に紛糾。
スペイン　カール５世が行き先は北アフリカ、
司令官は海賊のアンドリア・ドーリアを主張。
ローマ法王、ヴェネツィアはトルコ海軍撃退、
海賊が司令官ではダメと反論。

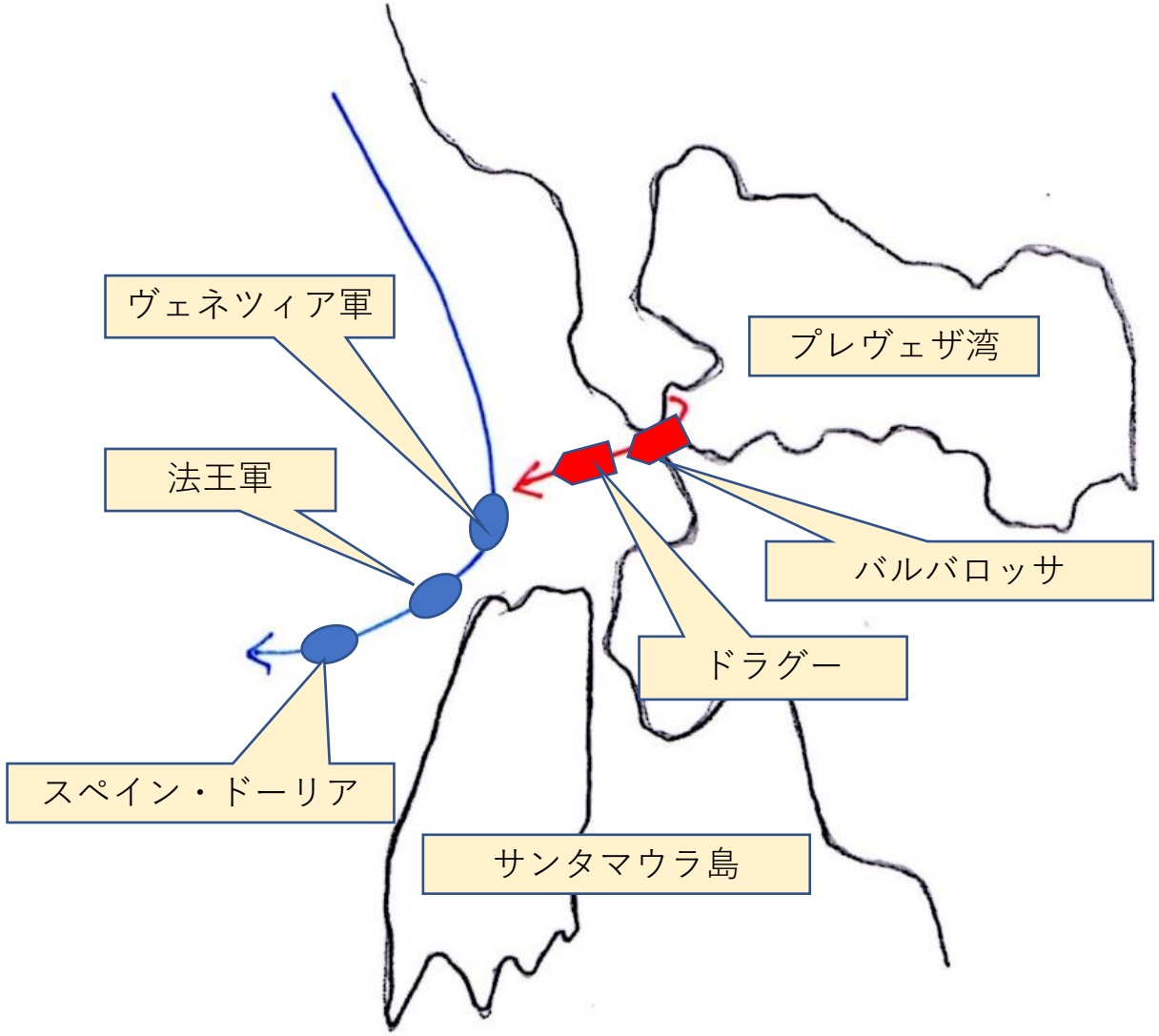
・妥協の結果、行先はトルコ海軍撃退に向かう、
司令官はドーリアとなりコルフ島集合になった

・1538年　コルフ島に集合
６月半ばヴェネツィアは82隻、法王軍は27隻、
１月以上遅れスペインは予定半分の49隻で集合

・1538年9月27日　コルフ島を出て南下

・トルコ軍はプレヴェザ湾内に潜み、先陣は
ドラグー、本陣はバルバロッサで待った

プレヴェザ海戦

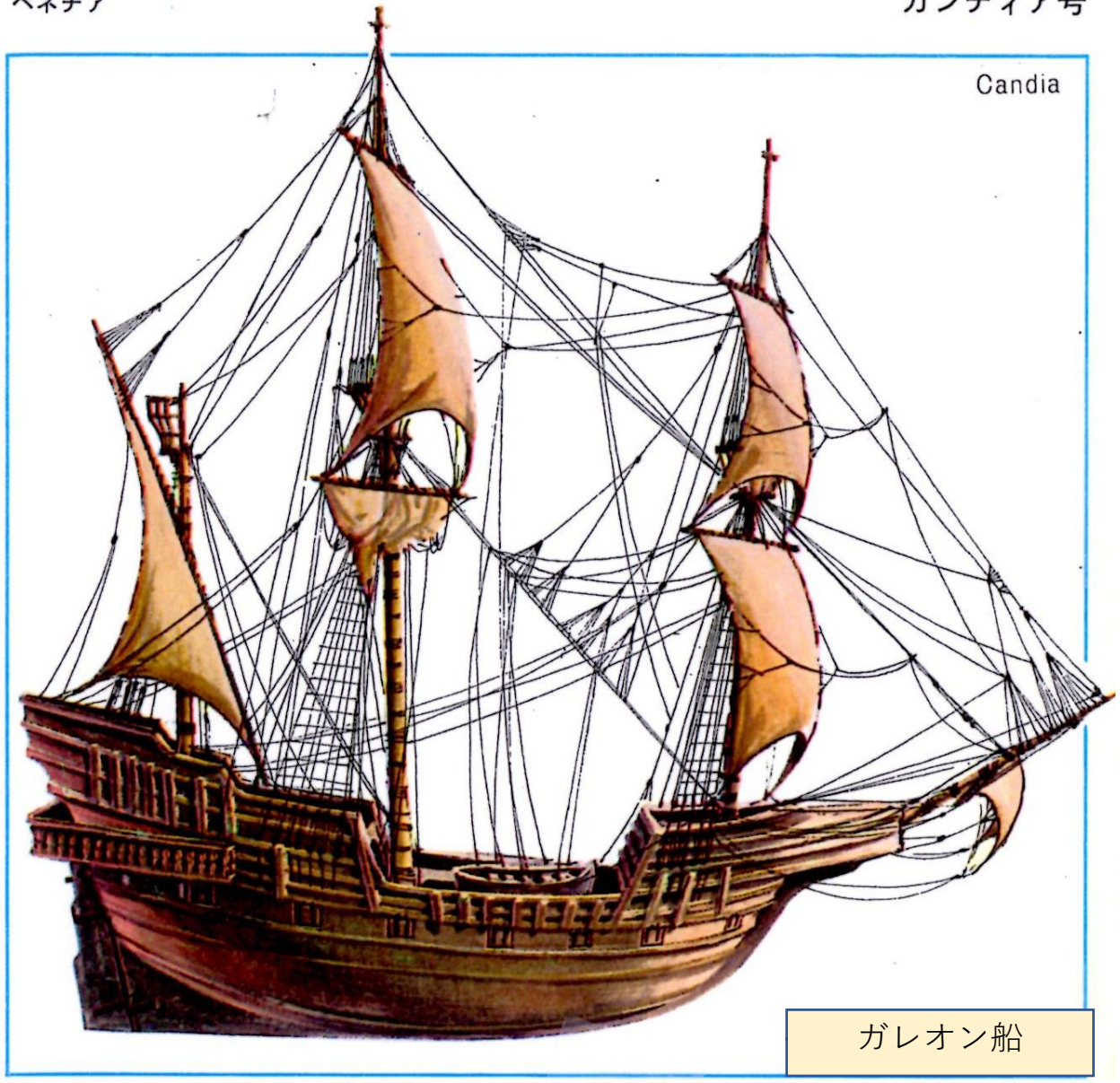


海賊ドーリア逃亡

- サンタマウラ島近くで接近。
- ドーリアは「近くに避難港がないので戦闘は危険。逃げろ」と命令して逃げる。
- トルコ軍は足の遅いヴェネツィア帆船を襲撃。帆船は砲撃で反撃、よく耐えたが、見かねたヴェネツィア ガレー船２隻が敵陣に突っ込み集中攻撃を受けて沈没。

プレヴェザ海戦

ベネチア　　カンディア号



ガレオン船

型式：ガレオン，３本マスト
進水：1530年ごろ
長さ：33.00m（バウスプリットから）
幅：8.50m　　深さ：4.00m
排水量：650t
武装：第１砲列　19ポンドカルバリン砲 16門，第２砲列　９ポンドデミ・カルバリン砲 16門
乗組員：船員　120名，兵士 160名

単独講和

- 奇妙な敗戦だった。
- 戦力を保持したまま逃走したドーリアは各国から非難を浴びた。
- 戦後、地中海には「トルコ海軍無敵」の声が行き渡り、サラセン海賊は襲撃を繰り返した。

- ヴェネツィアはナウプリオン、マルヴェジアを放棄する条件で講和する。

ペロポネソス半島

ナウプリオン

マルヴェジア

トルコとの闘い

レパントの海戦　第４次トルコ戦

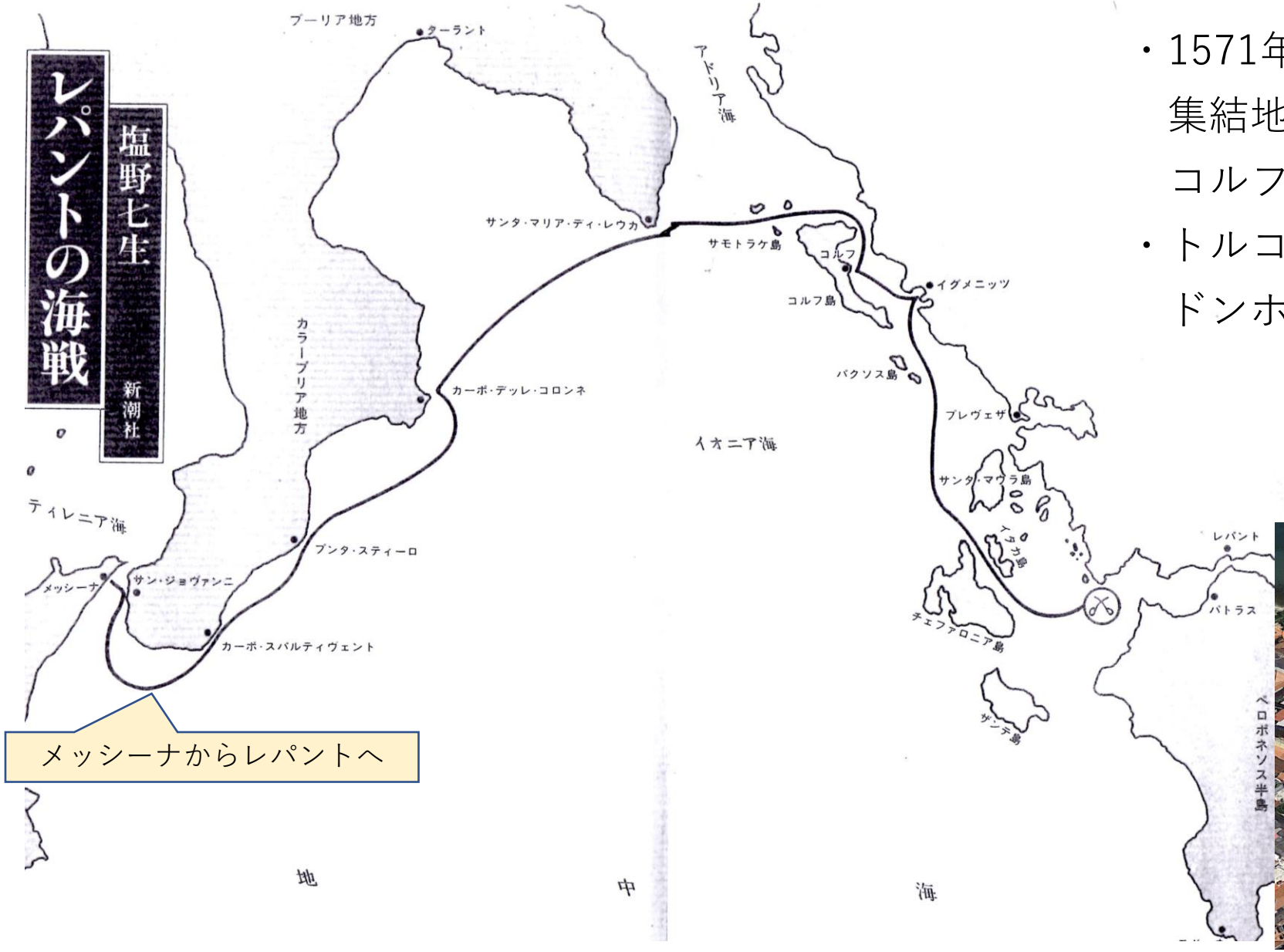
・1570年　スレイマン１世の跡継ぎセリム２世は酒精中毒。
６月ブドウ酒産地キプロス侵入。第４次トルコ戦開始。
９月首都ニコシアを陥落、最大の港町ファマゴスタを包囲。

・1571年　キリスト教国は連合艦隊を結成。
司令官はフィリップ２世弟ドン・ホアンに決定。

ファマゴスタ

レパントの海戦

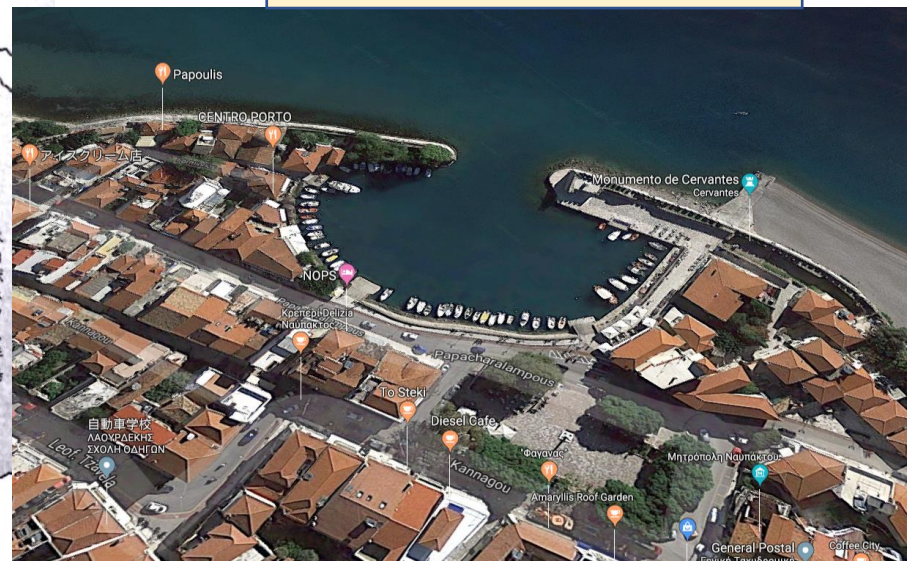
ドンホアン司令官



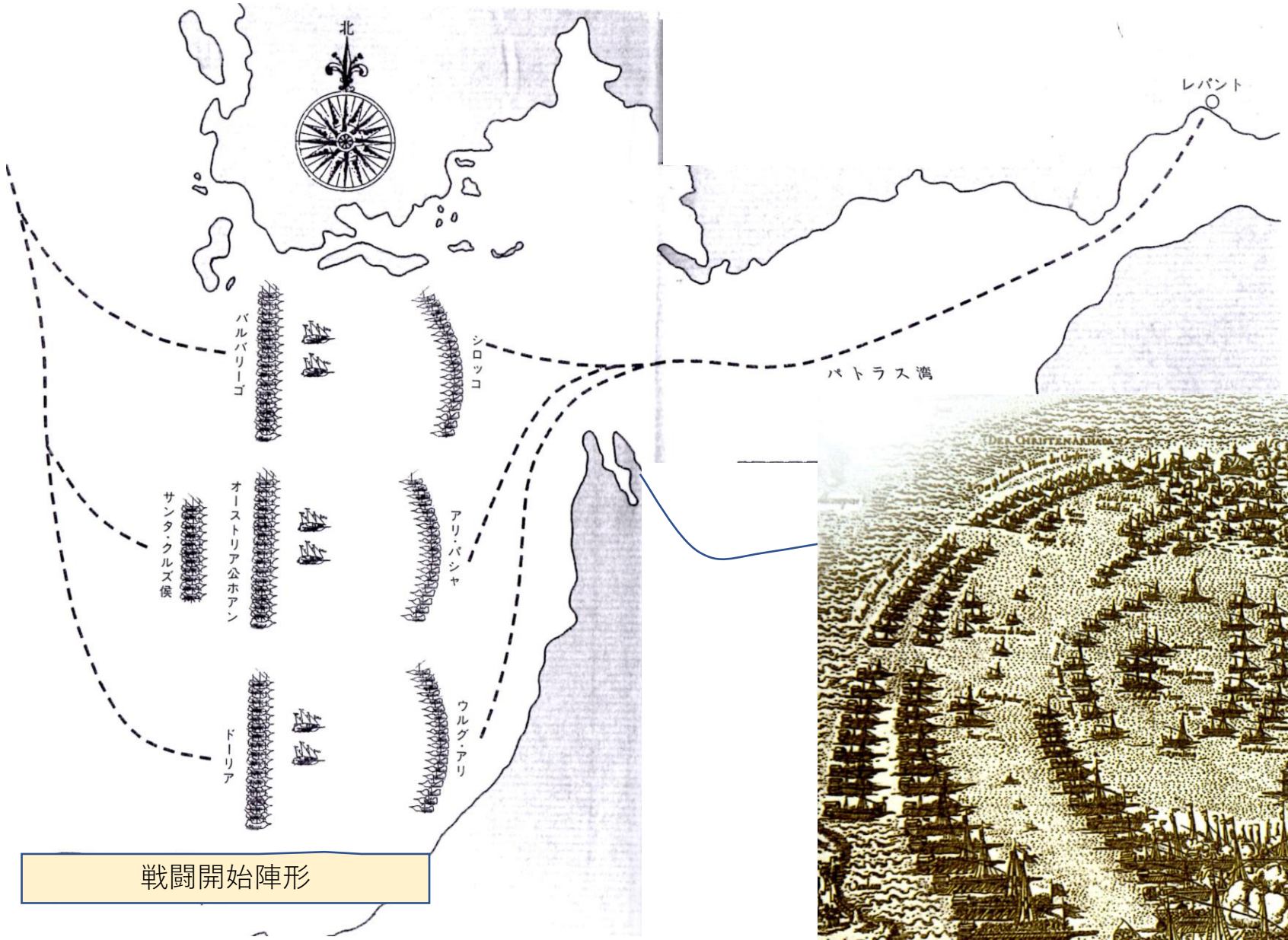
メッシーナからレパントへ

- 1571年9月28日　連合艦隊208隻は、集結地メッシーナを出港。コルフ島を経由しギリシャ西岸に達した。
- トルコ軍レパントに停泊の知らせを受けドンホアンは海戦を決定

レパント（現ナフパクトス）



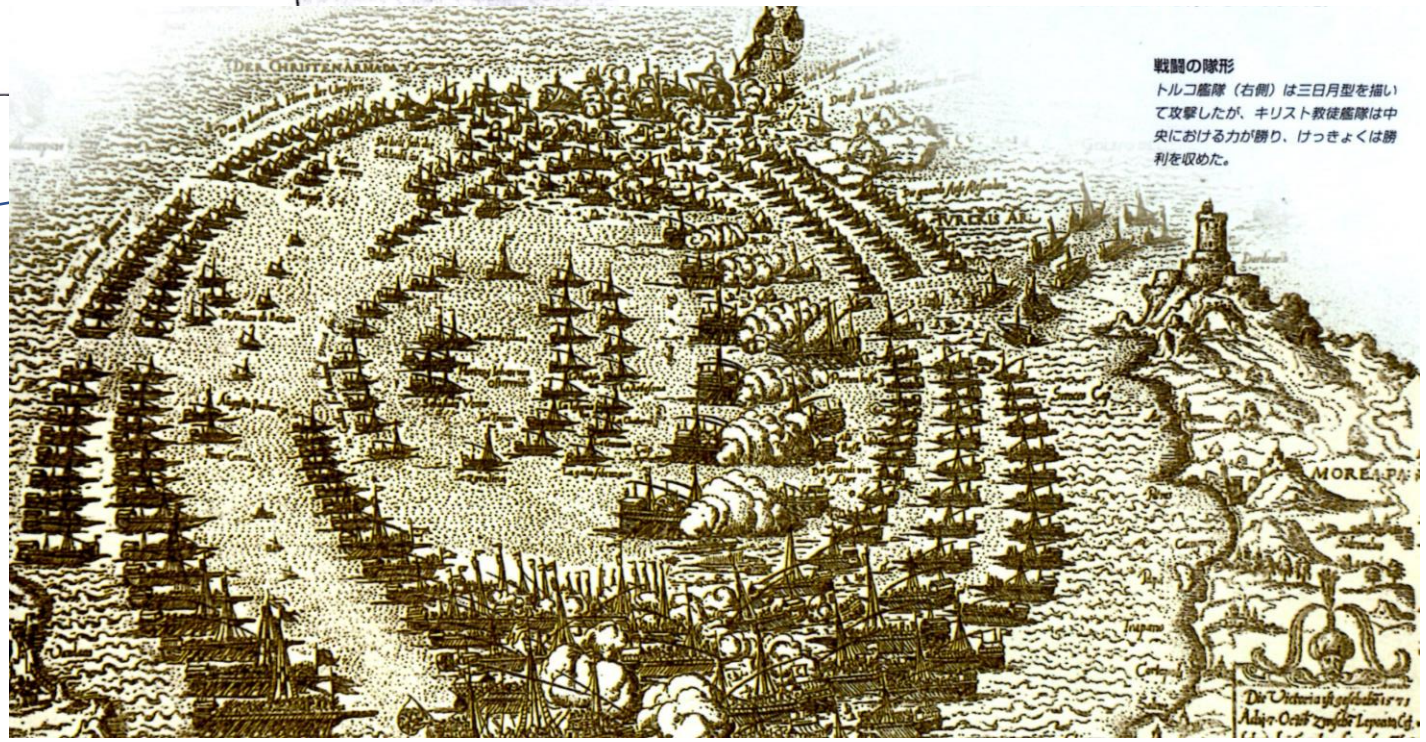
レパントの海戦



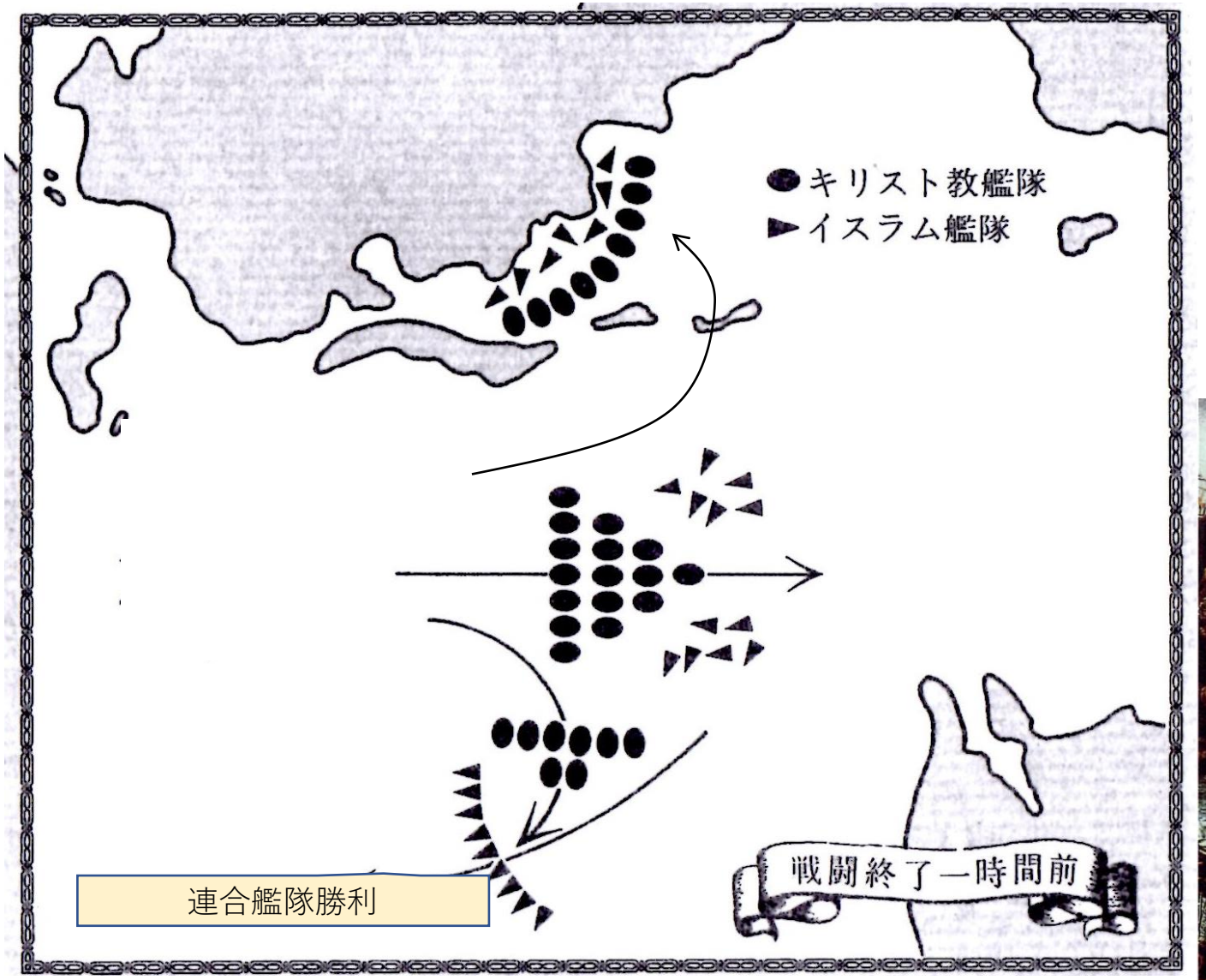
戦闘開始陣形

トルコ海軍出撃

・10月7日　パトラス湾入口に布陣した連合艦隊にレパントを出撃したトルコ軍212隻が激突



レパントの海戦



連合艦隊勝利

- 連合艦隊左翼バルバリーゴはトルコ軍右翼のシロッコを海岸に追い詰め全滅。
- 中央ドンホアン本隊はトルコ軍本隊のアリパシャ旗艦を占拠、アリパシャ戦死。
- 右翼ドーリアはトルコ軍左翼ウルグアリを逃がし完勝できた連合艦隊の足を引張った

レパントの海戦

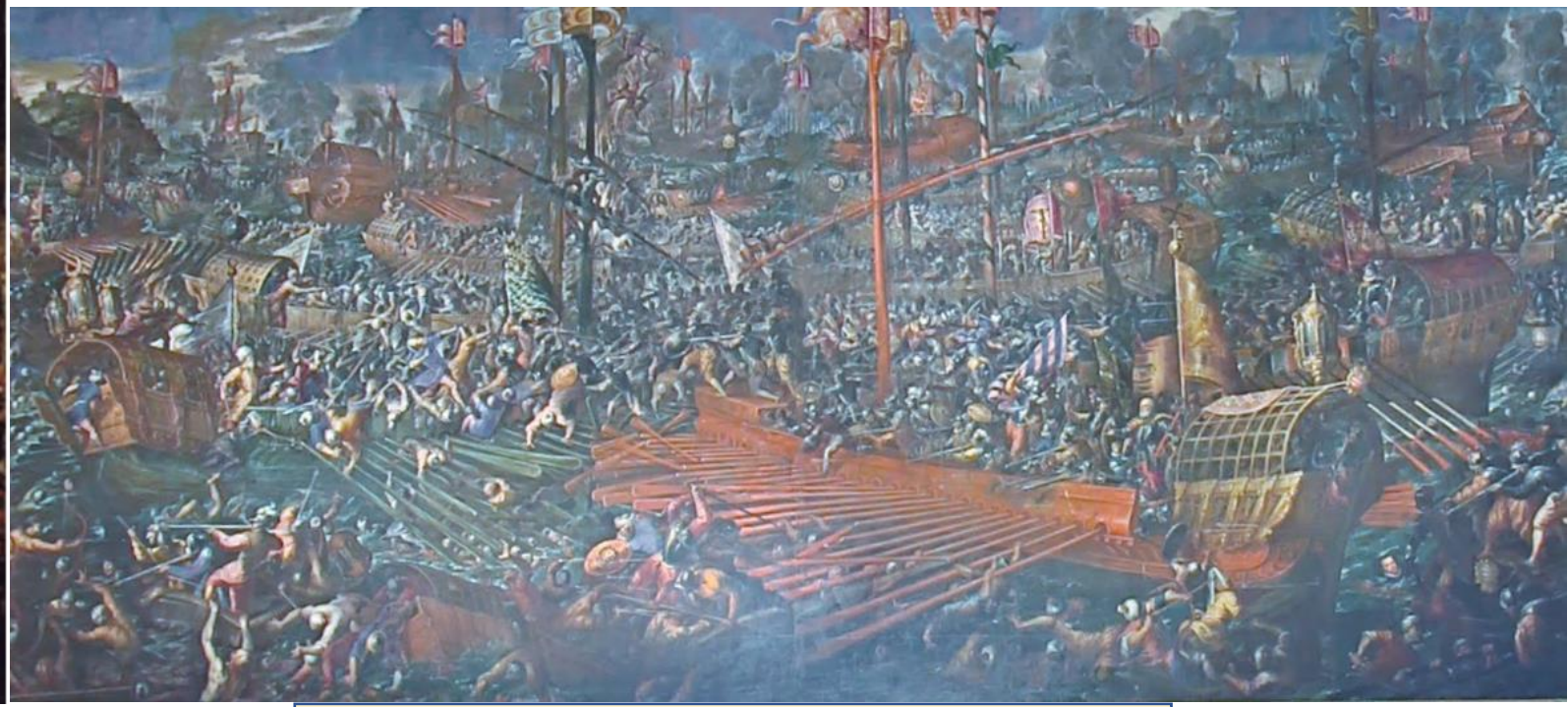
ヴェロネーゼ　アカデミア美術館

画期的勝利

連合艦隊の完勝は画期的だった。

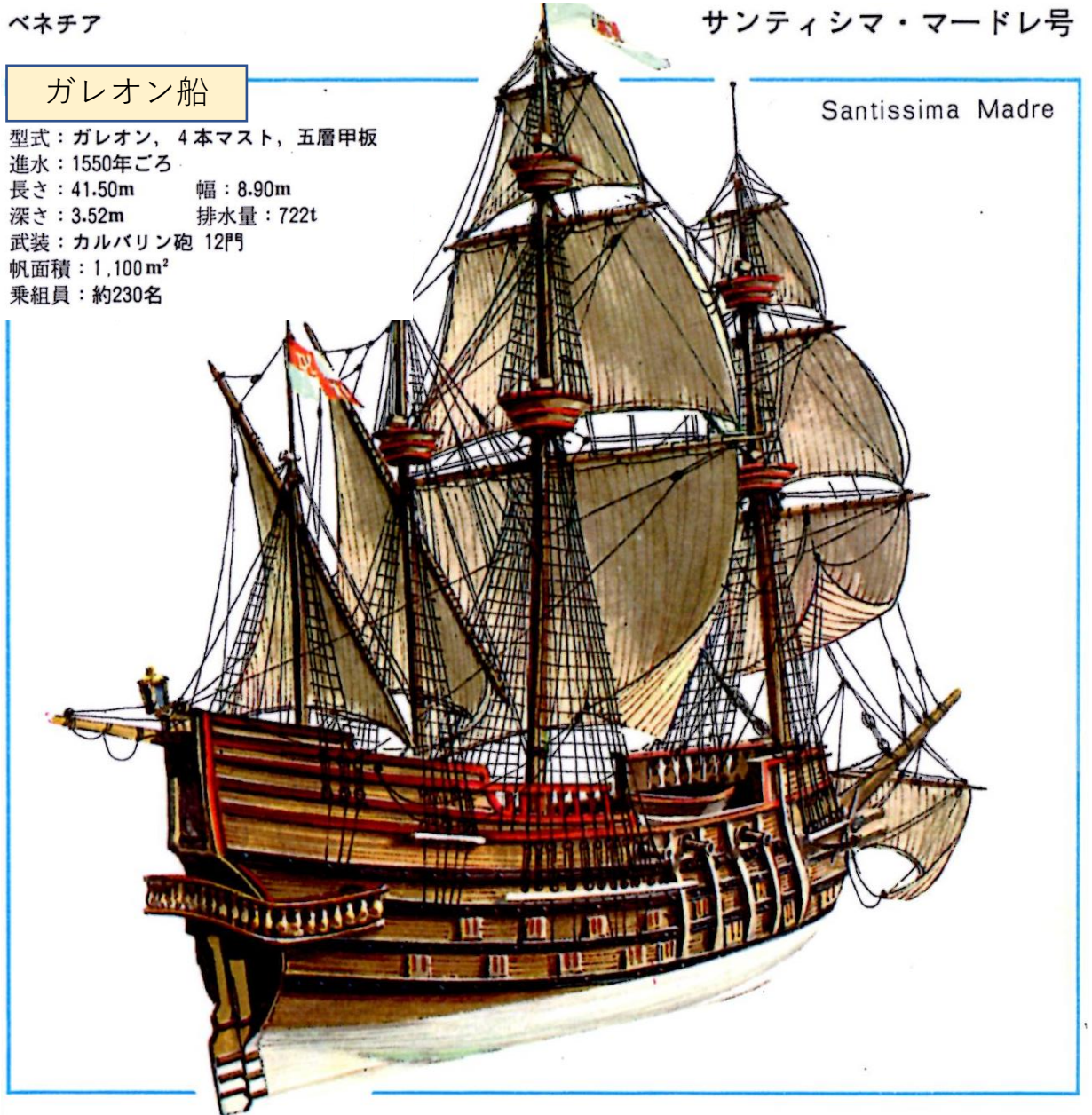
・トルコに対する劣等感が消えた。

・敗北なら確実に地中海はトルコの海になっていた。



ヴィンテンティーノ　元首宮殿　投票の間壁画

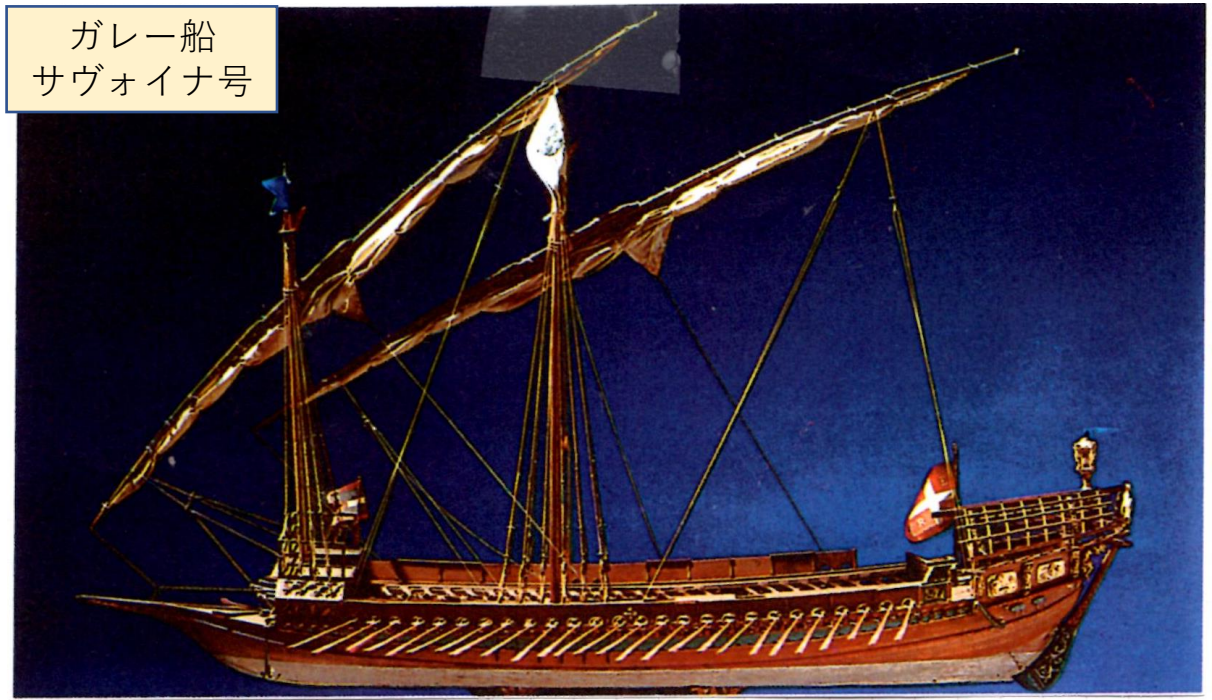
レパントの海戦



単独講和

・1572年　翌年も連合艦隊結成が図られたが、アルジェリア攻撃か、ウルグアリ撃滅か、３者の思惑の違いが出て解散。

・1573年　ヴェネツィアは最早これまでと単独講和。キリスト教国の非難を浴びた。



政治が守った平和

絵画～ルネサンス

・ヴェネツィアは対トルコ戦を凌いだ。

・言葉だけでは平和は守れない。外交と軍事を駆使して
安定した政治を行い漸く勝ち得た平和の遺産が絵画である

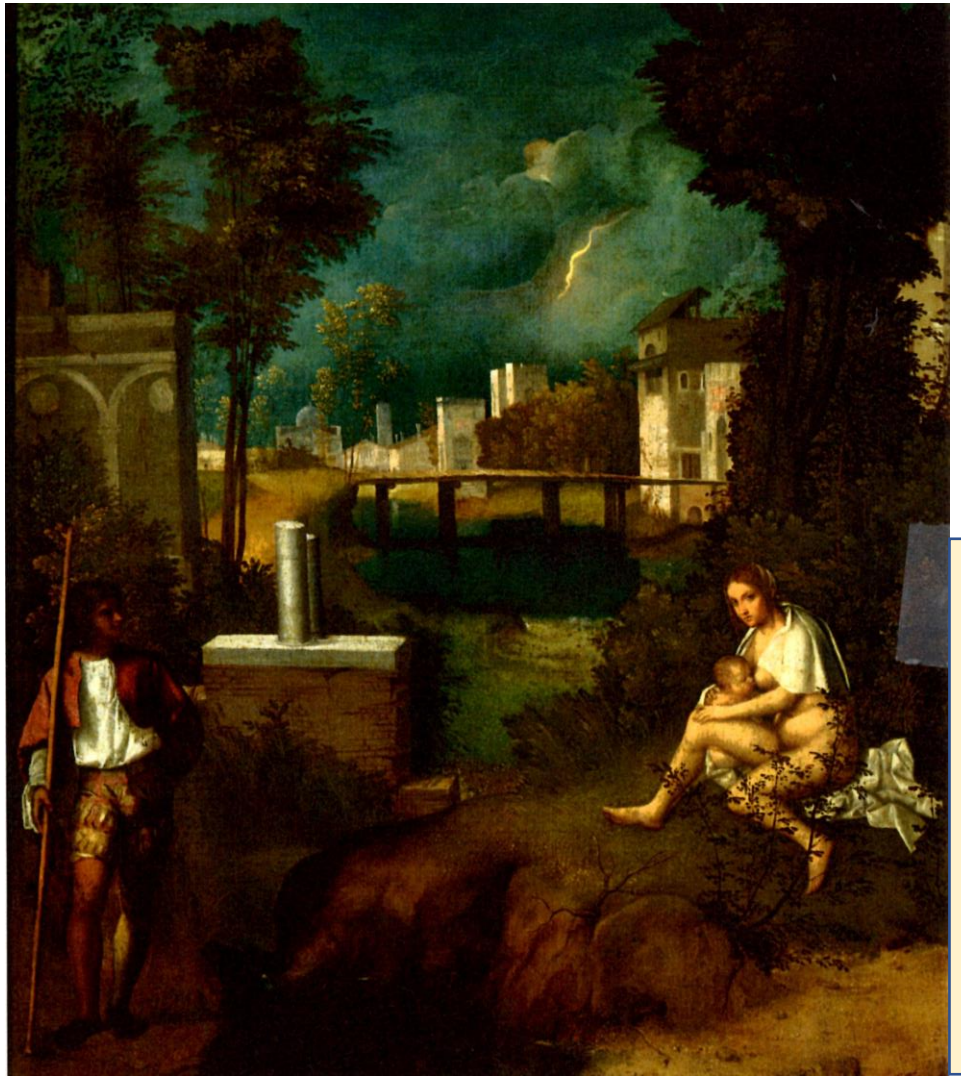
ベッリーニ　特記以外アカデミア美術館

カルパッチョ

政治が守った平和　　絵画～ルネサンス

・芸術振興の秘訣は政治の安定だった。フィレンツェもミラノも政治の混乱で潰れた
・政教分離も大きい。東方正教とキリスト教の境界にある独特な画風を生み出した

カルパッチョ　コッレール／ゲティ美術館に分散



ジョルジョーネ

ティツィアーノ

政治が守った平和

絵画～ルネサンス

・「政府の元首宮殿」「商人のスクオーラ」
安定して、継続した発注が絵画を生んだ

ティツィアーノ　サンサルバドル聖堂

ティツィアーノ
サンタマリアグロリオーサデフラーリ聖堂

ティントレット

産業構造の変化

海から本土へ

・16世紀　トルコ台頭、大航海時代到来で
ヴェネツィアは一旦後退するも、胡椒交易
復活、手工業育成、本土拡張により復活

・しかし、17世紀になると
東インド会社植民地経営で香辛料入荷減、
地中海航路の英、蘭に対する競争力低下、
三十年戦争でドイツ市場荒廃、ペスト流行、
何より地中海地方の森林資源枯渇など
環境悪化が連続する

↓

・この中で農地改革、農産物選択で本土の
農業は成長した

・産業構造が交易から農業に移り始めた

本土農園（ブレンダ川　ヴィッラ・ピサーニ）

衰亡期

第５次トルコ戦

・1647年　第５次トルコ戦争が始まった。トルコ軍はエーゲ海出口を塞ぐクレタ島を目障りとして攻め込んだ

・トルコ軍はヴェネツィア軍を首都カンディアに閉じ込め1647～1669年　25年間に及ぶ攻防戦が始まった

カンディア

城壁

衰亡期

第５次トルコ戦

・海軍総司令官フランチェスコ・モロシーニは25年間戦い抜くが、1年間の戦費が国家歳入を上回ると知り、講和を図る。

・1669年講和成立、撤退。

フランチェスコ
モロシーニ

カンディア港の要塞

衰亡期

モロシーニの凱旋門　元首宮殿投票の間

第６次トルコ戦

・1683年　トルコはウイーンに攻め込み
第２次ウイーン包囲戦が始まった。
キリスト教世界は神聖同盟を結成して
反撃に転じヴェネツィアも参画する。

・モロシーニを再び海軍総司令官に任じて
戦線に送る。

・トルコはオーストリア、ロシアから
攻められ余裕なく敗退、領土を取り戻す。

↓

・1688年　モロシーニは元首に選ばれる。
1694年　戦場で死ぬ。75歳だった。
元首宮殿に凱旋門が捧げられた。

↓

アンチヒーローの国にはない事だった

衰亡期

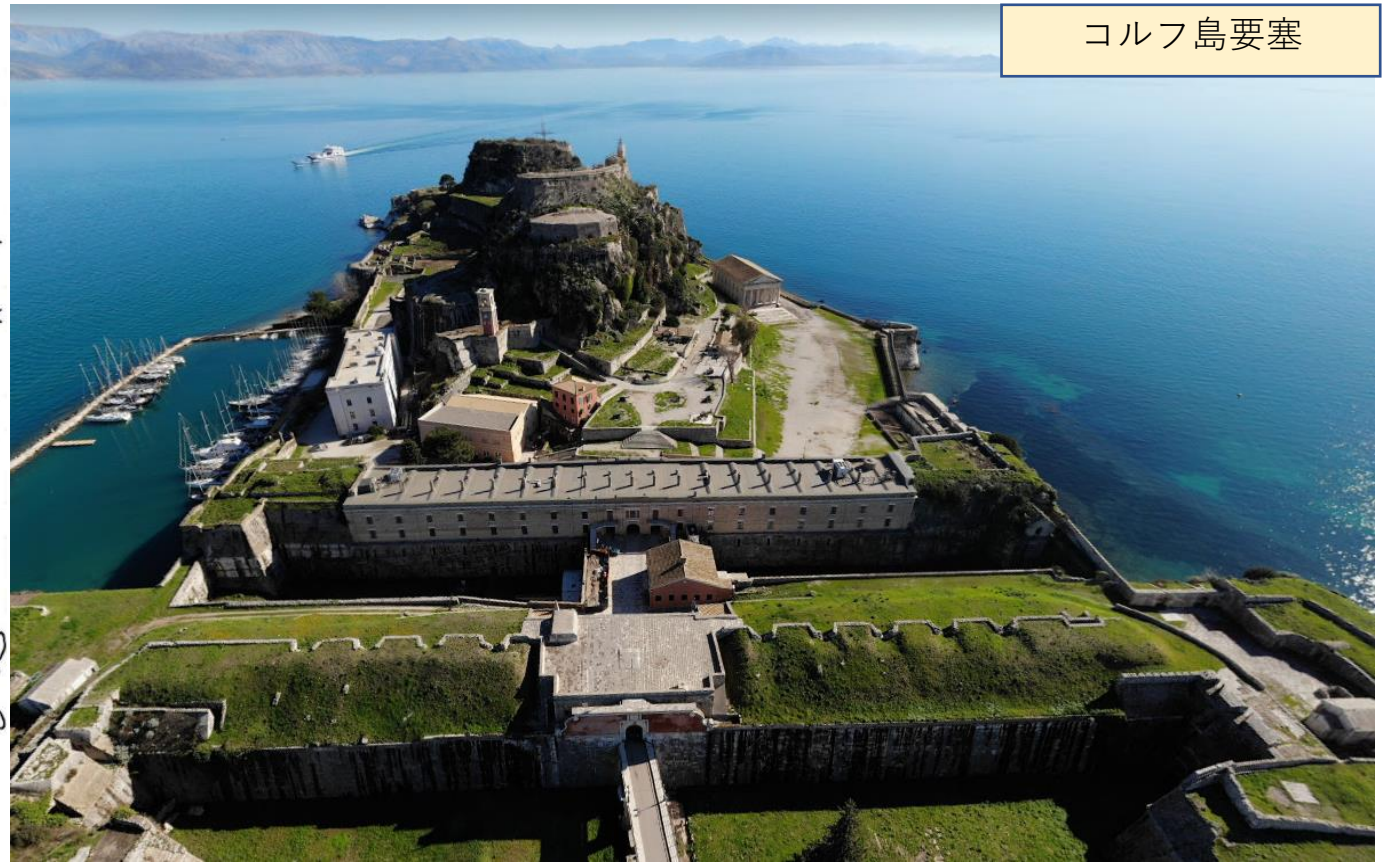
第７次トルコ戦

最後の海外領土

・1714年　トルコはロシアと講和しエーゲ海を攻撃。
　　ギリシャの基地は次々に落ちる。

・1716年　コルフ島防衛を最後に講和。
　　アドリア海のみ残る

コルフ島要塞



衰亡期

1700年を境に

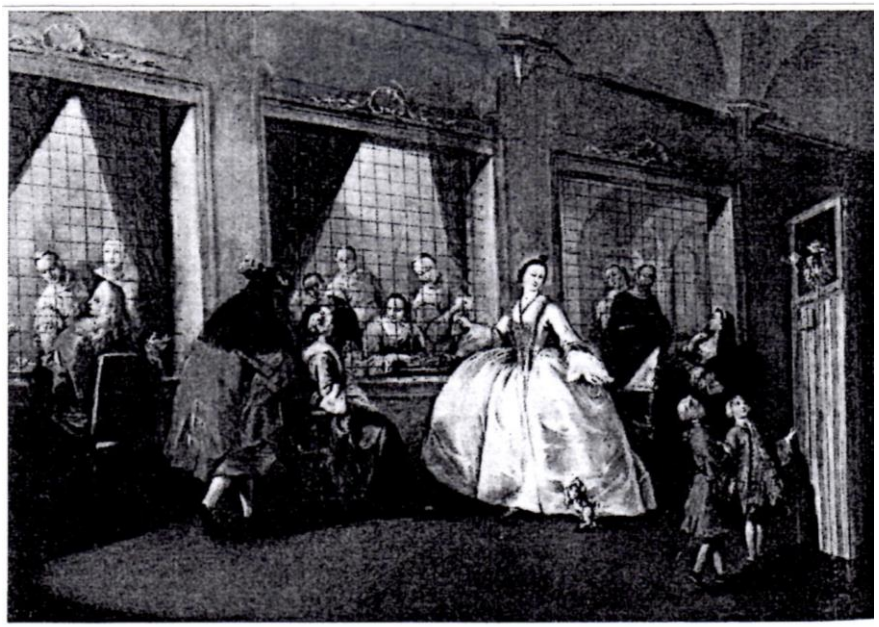
・戦いの教訓は「もはや単独では戦えない」だった。中立を堅持し、外国を刺激せず、現状維持に徹した

カナレット

・1700年を境に際立った差が生じる。
冒険、活動、危険、緊張、変動の時代から
静止、安全、中立、快楽追及の時代に変る

・新しい事態に背を向け「柔軟性の喪失」と
「精神の硬直性」が現れた。

・グランドツアーの観光地になった



尼僧院の面会室の風景（グアルディ画）

衰亡期　　1700年を境に

・ヴェネツィアの文化は高かった。庶民は豊かで、生活の楽しみがあった。

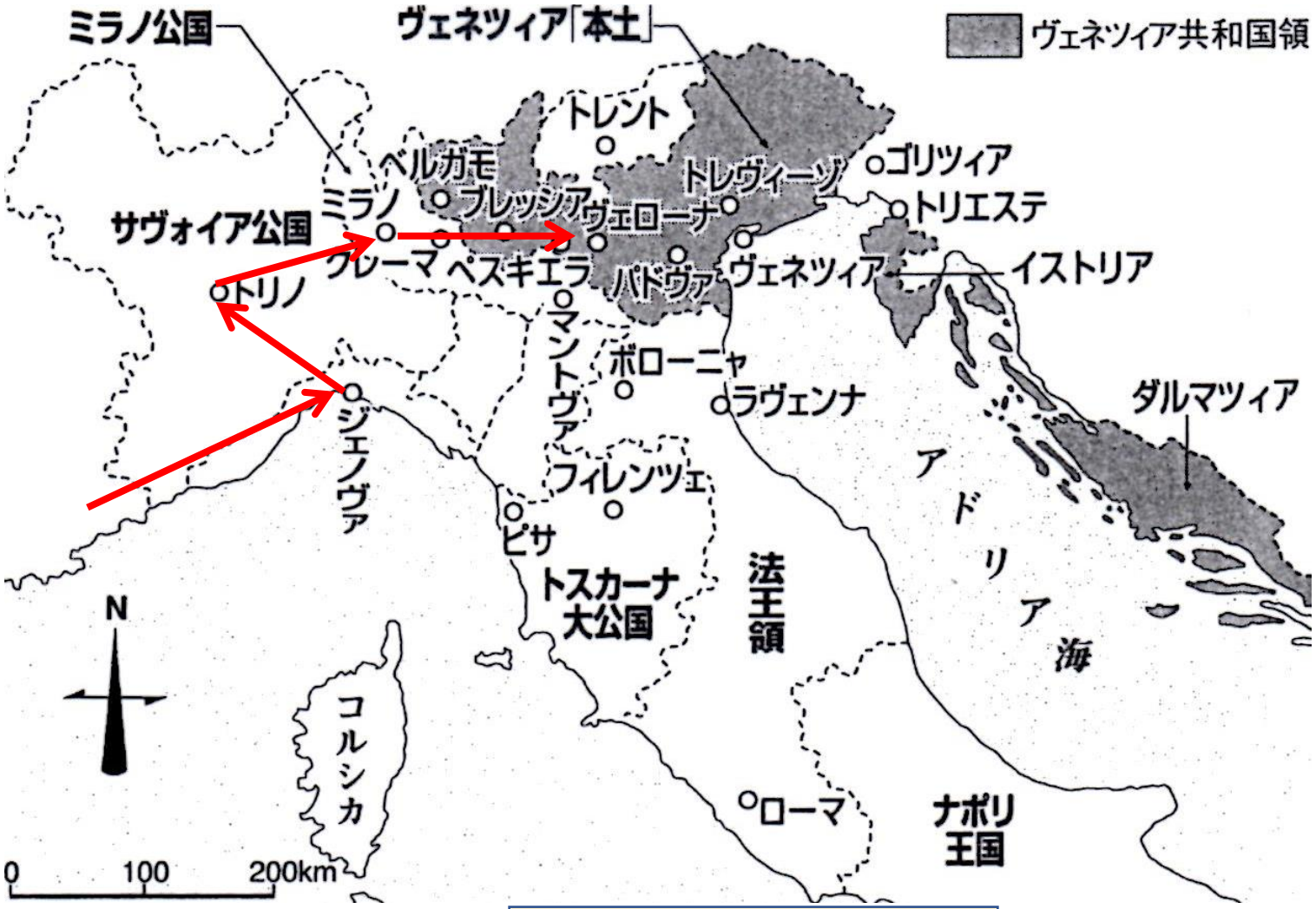
・観劇、オペラ、音楽、お祭り、謝肉祭。劇作家ゴルドーニ、音楽家ヴィヴァルディ、アルビノーニはこの時代の人だった。

双方ともロンギ　カ・レッツォーニコ

ヴィヴァルディ

滅亡

ナポレオン



イタリア侵入

- 1789年　フランス革命始まる。
- 1793年　ルイ16世処刑。
  欧州各国は対フランス戦同盟に立つが、
  ヴェネツィアは「中立」を守る
- 1796年3月21日　ナポレオンは26歳で
  イタリア方面軍司令官に着任。
  フランス軍はオーストリア帝国軍と
  ジェノバ、トリノ、ミラノで戦い占領
- 1796年6月　ヴェネツィア本土の首都
  ヴェローナに侵入する。

滅亡

ナポレオン

・ヴェネツィア本土首都ヴェローナへの国内侵入を受け
イギリス、オランダ、オーストリア、プロイセンから
対フランス同盟参加の勧誘あるも「絶対中立」を続行。

最後の元首ルドヴィゴ・マニン

ロレダンの肖像画と対照的
＜〜〜永井三明評

十人委員会

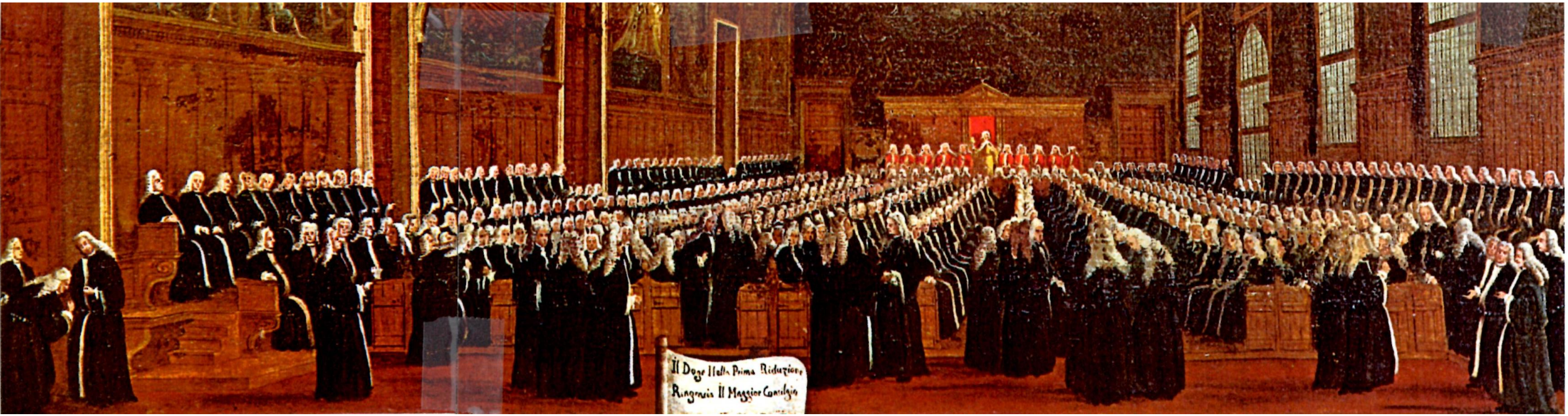
滅亡

ナポレオン

ナポレオン

- 1796年7月～11月　ナポレオンは対オーストリア戦闘で勝利を収める。
- 1797年5月1日「対仏レジスタンス」「ラグーナ侵入仏軍艦撃沈」に宣戦布告
- 5月12日　「無抵抗降伏」国会評決、537人中512人賛成、20人反対で降伏決定
- 5月16日　仏軍進駐。サンマルコ広場に「自由、平等、博愛」立札、共和国滅亡

共和国国会の投票



ヴェネツィア人の姿勢

・旺盛な好奇心：好奇心に満ちて見知らぬ海外へ船出した。

・ドグマからの自由：「まずヴェネツィア人」「次いでキリスト教徒」で生きた。

・資本主義：「はじめに商売ありき」交易に基づく資本主義を育てた。

しかし、共和国は滅亡した。
産業が海から土地へ移り、静止・安全の時代に入って
「柔軟性の喪失」「精神の硬直性」を招いた為である。

日本を考える

・世界は激しく変化している。
新しい事態に背を向け「柔軟性の喪失」「精神の硬直性」を来たしてはいけない。

・国際社会は「永遠の同盟も、永遠の敵対もない。あるのは永遠の国益だけだ」と言われる。国益を追求するに於いては、確固たる基盤が必要である。
・日本には「豊かな自然」「旺盛な好奇心」「ドグマからの自由」という大昔から変わらぬ日本の基盤が存する。

・「精神の硬直性」を来たして、いたずらに政局だけに走る人々やリフレの腰を折ろうとする人々を排除して、自分の足で立つ「自立」を図るべきである。
・今や機は熟した。「憲法改正」「デフレ脱却」を確実に進めることが必須である。